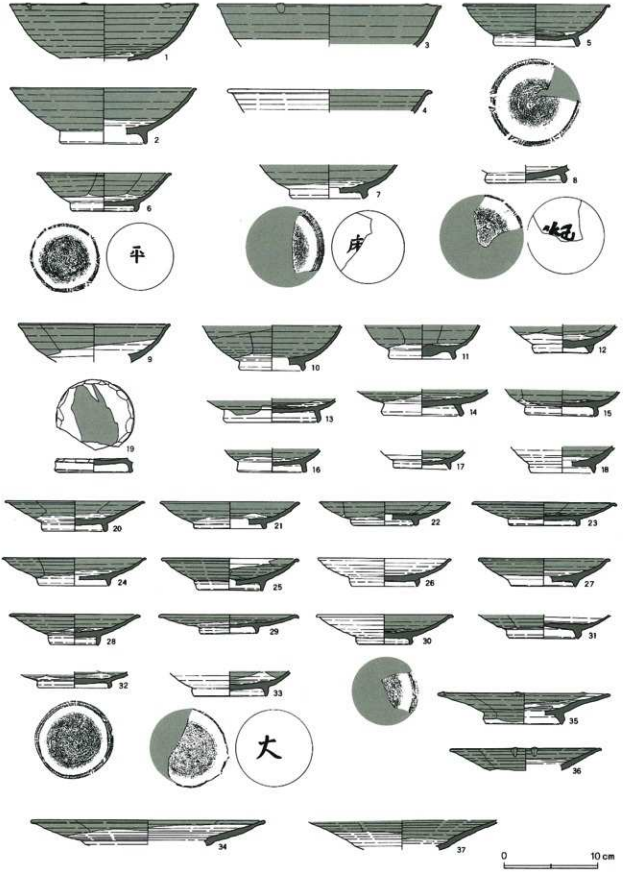
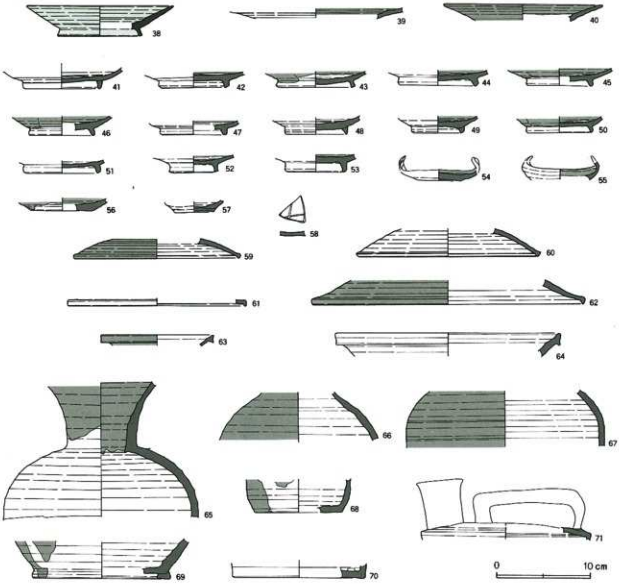
第790図　9世紀後半の灰釉陶器（1）



第791図　9世紀後半の灰釉陶器（2）



やその他の土器など、第4号掘立柱建物跡のように特定できる建物を確認できなかった。

③第50号掘立柱建物跡の周辺は、焼失したこの建物跡の上層部から大量の、灰釉陶器の細片が出土した。ことに長頸壺などの壺類が多く目立った。

④第4土壙群の周辺は、付近に大形の、掘立柱建物跡群はみられず、小規模な土壙の連続によって構成された第4土壙群の直上の遺物包含層から比較的まとまって灰釉陶器の破片が出土した。

⑤第65号掘立柱建物跡。主要な遺構の東端に当たる同遺構の南側に集中して、灰釉陶器の破片が出土した。

黒笹14・90号窯式の灰釉陶器の詳細は、結語（灰釉陶器）を参照されたい。

第792図は、遺物包含層中からの折戸53号窯式以降の灰釉陶器の分布状況である。折戸53号窯式以降の灰釉陶器は、10世紀の遺物包含層中の遺物の分布と基本的に一致した。やはり調査区の西に多く分布していた。

ことに10世紀代の灰釉陶器が、集中して出土したのは、①第12号区画溝の周辺、②第40号掘立柱建物跡の周辺、③第44号掘立柱建物跡の周辺、④調査区南端である。とくに②第40号掘立柱建物跡の周辺では、比較的大量の灰釉陶器が出土している。

第648表　9世紀後半の灰釉陶器観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	輻輻	色調	残存	出土位置その他
1	輪花付高台付椀	K	20.0				B, D	良好		灰白	40	被熱
2	高台付椀	K	19.3				B, D	良好		灰白（やや黄味）	10	墨書
3	輪花付高台付椀	K	23.7	5.9		8.7	B, D	良好		淡黄褐	20	
4	高台付椀	K	21.4				B	良好		外-灰白, 内-オリーブ灰	5	
5	高台付椀	K	15.4	4.4		8.3	B, D	良好		黄灰	5	墨書状シミ
6	高台付椀	K	14.1	4.1		6.7	B, D	良好		暗灰白	70	墨書，被熱
7	高台付椀	K				7.7	B, D	良好		灰白	20	墨書
8	高台付椀	K				8.1	B, D	良好		灰白（白味強い）	20	SC－25付近　墨書（朱墨）
9	高台付椀	K	16.0				B, D	良好		灰白	15	
10	高台付椀	K				6.5	B, D	良好		外-灰白, 内-オリーブ灰	20	
11	高台付椀	K				6.7	D	良好		灰白	90	被熱?
12	高台付椀	K				6.0	B	良好		淡灰白	30	
13	高台付椀	K	9.7				B, D	良好		灰白	20	被熱痕
14	高台付椀	K				8.2	B, D	良好		灰白	20	被熱
15	高台付椀	K				7.2	B, D	良好		灰白	100	
16	高台付椀	K				6.7	B, D	良好		灰白	60	ヘラ記号
17	高台付椀	K				5.8	B, D	良好		灰白	70	
18	高台付椀	K				6.8	B, D	良好		灰白	20	
19	高台付椀	K				7.8	B	良好		灰白	20	
20	高台付皿	K	14.5	3.2		6.5	B, D	良好		灰白	底部50 他 25	被熱
21	高台付皿	K	14.5	2.9		7.2	B, D	良好		暗灰白	20	
22	高台付皿	K	13.7	2.6		6.4	D	良好		灰白	25	
23	高台付皿	K	14.8	2.5		7.1	B, D	良好		暗灰白	30	
24	高台付皿	K	15.0	3.0		7.3	B, D	良好		灰白	25	
25	高台付皿	K	14.3	3.4		6.1	B, D	良好		暗灰	30	
26	高台付皿	K	13.9	3.0		7.0	B, D	良好		灰白	60	
27	高台付皿	K	13.5	3.0		6.6	A, B, K	良好		灰白	底部50 他 20	
28	高台付皿	K	13.2	3.2		5.0	B, D	良好		灰白	30	
29	高台付皿	K	14.3	2.0		5.9	D, G	良好		灰白	60	
30	高台付皿	K	14.2	3.1		5.5	B	良好		灰白	20	墨書
31	高台付皿	K				7.3	D	良好		灰白	60	
32	高台付皿	K				7.4	B, H	良好		灰白	30	墨書
33	高台付皿	K				7.4	B, D	良好		淡灰	30	墨書
34	段皿	K	24.7	2.6			B, D	良好		灰白	20	
35	輪花付高台付皿	K	17.8	3.3		8.0	B, D	良好		緑灰	30	
36	輪花付高台付皿	K	14.9				B, D	良好		灰白	20	被熱
37	段皿	K					B, D	良好		灰白	10	被熱
38	段皿	K	15.4	3.1		8.5	B, D	良好		灰白	10	
39	段皿	K					B	良好		灰白	10	
40	段皿	K	16.7				B, D	良好		オリーブ灰	10	被熱
41	高台付椀か皿	K				7.8	B	良好		灰白	10	
42	高台付椀か皿	K				6.6	B, D	良好		灰白	100	
43	高台付椀か皿	K				7.6	B, D	良好		灰白	50	
44	高台付椀か皿	K				7.8	B	良好		灰白（やや黄味）	50	
45	高台付椀か皿	K				6.5	B	良好		灰白	20	
46	高台付椀か皿	K				6.5	B, D	良好		灰白	30	
47	高台付椀か皿	K				6.7	B	良好		灰白	5	
48	高台付椀か皿	K				6.5	B, D	良好		灰白	10	

第649表　9世紀後半の灰釉陶器観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
49	高台付椀か皿	K				5.0	B, D	良好		灰　白	10	遺構確認掘り下げ
50	高台付椀か皿	K				6.6	B, D	良好		灰　白	20	
51	高台付椀か皿	K				7.6	B, D	良好		灰　白	30	墨書
52	高台付椀か皿	K				4.3	D	良好		灰　白	20	覆土中
53	高台付椀か皿	K				5.8	B, D	良好		灰　白	100	
54	耳　皿	K				4.7	B, D	良好		灰　白	25	
55	耳　皿	K					B	良好		灰　白		
56	耳　皿	K				6.3	B, D	良好		灰　白	15	被熱
57	耳　皿	K				4.2	D	良好		灰　白	100	被熱
58	高台付椀か皿	K					B, D	良好		外－灰白, 内－オリーブ灰		印?
59	壺	K					B, D	良好		灰　白	5	
60	壺	K	19.0				B, D	良好		灰　白	10	
61	壺	K					B, D	良好		灰　白	5	被熱
62	壺	K	28.8				D	良好		灰　白	5	被熱
63	長頸壺	K	11.9				D	良好		外－灰白, 内－オリーブ灰	10	被熱
64	広口壺	K	23.7				B, C, D	良好		灰　白	10	
65	長頸壺	K	17.5				B, D	良好		灰　白	30	
66	長頸壺	K					C	良好		灰　白	10	
67	長頸壺	K					B, D	良好		外－オリーブ灰, 内－黄白, 中央黄褐	15	被熱
68	手付瓶	K				9.4	B, D	良好		灰　白	20	被熱
69	長頸壺	K				14.4	B, D	良好		灰　白	5	
70	手付瓶	K				13.7	D	良好		灰　白	5	
71	平瓶	K					B, D	良好		灰　白		

遺跡全体を覆う焼土・炭化物混じりの層より、上位から出土した遺物群である。また中堀遺跡内から出土した10世紀の土器の分布と共通する。

折戸53号窯式段階の灰釉陶器の中には、熱を受けた遺物はみられなかった。

第793図は、遺構包含層中の主な折戸53号窯式以降の灰釉陶器である。1から8は、高台付椀である。1は、J－15－1、2は、M－15－2、3は、R－22（23）、4は、E－6－2、5は、G－5－3、6は、J－15－1、7は、S－22－3、8は、L－7から出土した。

9から21は、高台付皿である。9は、J－15－4、10は、J－7、11は、T－19－2、12は、F－7－2、3は、T－15－3、14は、F－8－3、15は、I－9－3、16は、J－7－2、17は、R－19－1、18は、R－11－1、19は、G－10－1、20は、古墳時代第5号住居跡、21は、U－23から出土した。

22から28は、段皿である。22は、M－10、23は、I－12－3、24は、R－10－4、25は、E－3－2、26は、L－15－2、27は、SJ43、28は、J－11－1である。

29は、輪花付段皿である。E－6－3から出土した。

31・32は、高台付皿である。31は、J－11－1、32は、S－15－2から出土した。

30・33は、耳皿である。30は、E－7－4、32は、S－15－2から出土した。

34・35・38・39は、小瓶である。34は、G－7－4、35は、（旧）SJ42、38は、（旧）N－15－1、39は、I－15である。

36・37・40は、長頸壺である。36は、G－4、37・40は、J－15－2から出土した。

41は、手付瓶である。表土層中の出土である。

折戸53号窯式以降の灰釉陶器の詳細は、結語（灰釉陶器）を参照されたい。

第792図　10世紀の灰釉陶器出土分布図

白磁

第794図1は、白磁椀の底部破片である。厚く白色の釉がみられ、高台部は幅広く作られている。H－4から出土した。

緑釉陶器

第794図2は、緑釉緑彩の段皿である。口縁部に内向しておそらく4単位の宝相華文が、濃緑色の釉薬で描かれている。断片的な2片の資料であるが、おそらく同一個体と考えられる。H－12－4から出土した。

第794図3から第795図58は、緑釉陶器である。3から8、19から29、44から52を除いて器形の復元をできる破片はみられなかった。

色調は、28のみが濃緑色である他は、淡い緑色である。3・4・5・15・16・19・27・28・29・30・34から38には、内外面に細かなミガキが確認できる。

破片のため被熱の有無は確認しにくいが、ほとんど緑釉陶器は被熱を受けたと判断した。

また遺構内の緑釉陶器を含めて緑釉陶器は、ほとんど黒笹90号窯式段階と考えられる。

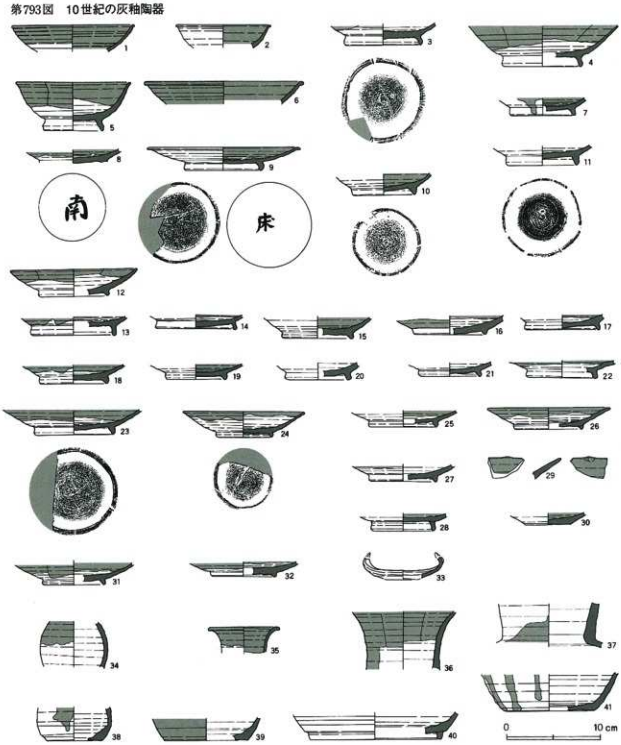
3・4・13・17は、稜椀である。3は、K－15－1、4は、H－13－4、13は、K－15－2、17は、H－8－3から出土した。

5から12、14から16、18から22は、高台付椀である。5は、K－15－2、6は、表採、7は、I－15－1、8は、L－14－2、9は、(旧) SJ78、10は、K－15－4、11は、K－14－2、12は、K－15－2、14は、F－2、15は、SJ90、16は、P－18－2から出土した。

23・24は、高台付皿である。23は、表採、24は、J－15から出土した。

25から29は、稜皿である。25は、G－7－1、26は、

第793図　10世紀の灰釉陶器



N－14－3、27は、N－14－3、28は、表採、29は、K－15－4から出土した。

30から43は、高台付椀か皿である。30は、L－13－4、31は、J－16－2、32は、F－8－4、33は、表採、34は、F－8、35は、L－14－2、36は、K－14－2、37は、L－15－2、38は、表採、39は、F－8－2、40は、F－8、41は、表採、42は、F－6－4、43は、表採である。

44から51、53から58は、高台付皿である。44は、R－11、45は、R－8－1、46は、K－5－2、47は、J－14－4、48は、K－14－2、49は、H－12、50は、L－14－2、51は、L－14－2、53は、表採、54は、

第650表　10世紀の灰釉陶器観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鋳	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	K	13.0				B, D	良好		灰白	10	被熱
2	高台付椀	K	9.8				B, D	良好		灰白	20	
3	高台付椀	K				7.9	B, D	良好		暗灰白	30	墨書，覆土中
4	高台付椀	K				8.2	B, D	良好		灰白	40	
5	高台付椀	K	12.2	5.2		6.3	B	良好		灰白	25	被熱
6	高台付椀	K	16.6				D	良好		灰白	10	
7	高台付椀	K				6.7	B, D	良好		灰白	40	
8	高台付椀	K					B, D	良好		灰白	60	墨書
9	高台付皿	K	15.8	2.4		7.9	B, D	良好		灰白	40	墨書
11	高台付皿	K				7.2	B, D	良好		灰白やや黄味	100	墨書
12	高台付皿	K	13.4	2.8		7.1	B, D	良好		灰白(やや黄味)	25	
13	高台付皿	K				8.6	B, D	良好		灰白	20	
14	高台付皿	K				8.3	B	良好		灰白(やや黄味)	40	被熱?
15	高台付皿	K				7.3	B, D	良好		灰白(やや黄味)	20	SC−7付近
16	高台付皿	K				7.5	B	良好		灰白	20	
17	高台付皿	K				7.6	B, D	良好		灰白(やや黄味)	40	
18	高台付皿	K				7.1	B	良好		灰白	20	
19	高台付皿	K				6.2	B, D	良好		灰白	40	
20	高台付皿	K				6.3	B	普通		灰白(黄味)	40	
21	高台付皿	K				6.4	B, D	良好		灰白	15	
22	段皿	K				7.2	B	普通		灰白	10	
23	段皿	K				8.2	B, D	良好		灰白	30	墨書
24	段皿	K	12.6	2.7		5.7	B, D	良好		灰白	60	墨書らしきもの
25	段皿	K				6.8	B, D	良好		灰白	15	
26	段皿	K	12.8	2.3		7.0	B	良好		灰白	15	
27	段皿	K				6.8	B	良好		灰白	20	
28	段皿	K				6.3	B	良好		灰白	10	
29	輪花付段皿	K					B	良好		灰白	10	
30	耳皿	K				5.0	B, D	良好		灰白	60	被熱
31	高台付皿	K				6.2	B, D	良好		灰白	20	
32	高台付皿	K				6.5	B	良好		灰白	15	被熱
33	耳皿	K					B, D	良好		灰白	10	
34	小瓶	K					D	良好		灰白	10	
35	小瓶	K	7.1				B, D	良好		灰白	10	
36	長頸壺	K					B, D	良好		オリーブ灰	40	被熱
37	長頸壺	K					B	良好		淡灰	10	破片
38	小瓶	K				5.6	B, D	良好		灰白	40	被熱
39	小瓶	K				8.8	D	良好		灰白	5	
40	長頸壺	K				13.9	B	良好		灰白，釉−灰オリーブ	5	
41	手付瓶	K				9.7	B, D	良好		灰白	40	

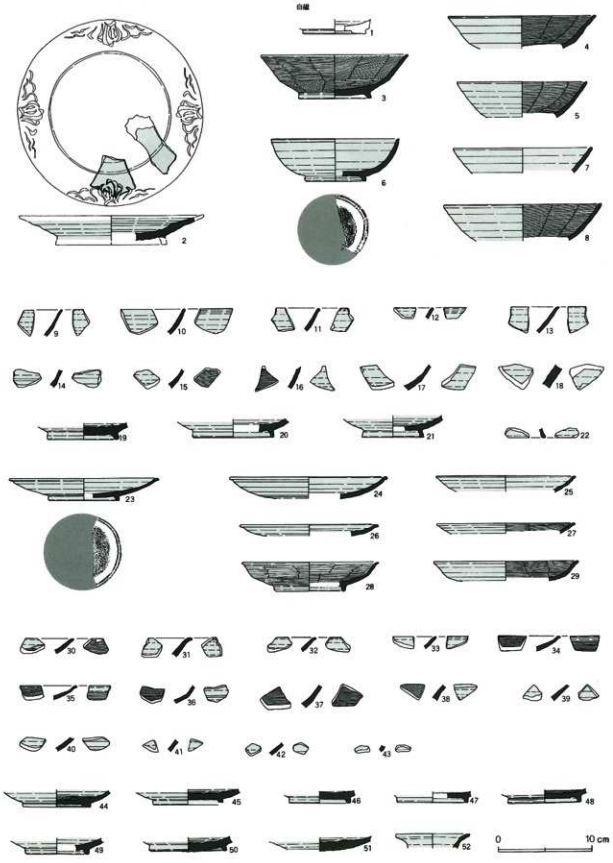
G−10−3、55は、O−19−2、56は、表採、57は、O−17−4、58は、L−14−2である。

52は、小瓶である。E−5から出土している。

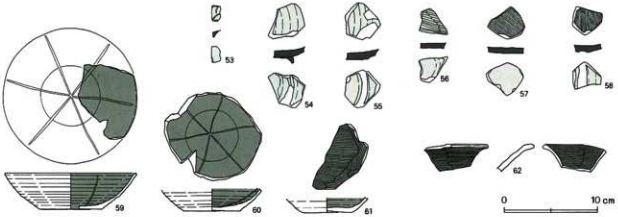
黒色土器

第795図59から62は、黒色土器である。59・60は、内面に放射状のミガキがみられる。61は、内面のみにヘラミガキ、黒色処理がみられる。62は、内外面にヘラ

第794図　グリッド　緑釉（1）



第795図　グリッド　緑釉（2）



第651表　緑釉・白磁・黒色土器観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	白磁				6.1		良好		白	10	
2	緑釉緑彩段皿	M					B	良好		淡緑	20	
3	稜椀	M	15.2	4.6		7.3	B	良好		濃緑	30	
4	稜椀	M	15.3				B	良好		淡緑	10	
5	高台付椀	M	13.5				B	良好		淡緑	10	
6	高台付椀	M	13.6	4.4		6.0	B	良好		淡緑	30	
7	高台付椀	M	14.5				B	良好		淡緑	20	
8	高台付椀	M	16.5				B	良好		淡緑	5	
9	高台付椀	M					B, D	良好		淡緑	5	
10	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
11	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
12	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
13	稜椀	M					B	良好		淡緑	5	
14	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
15	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
16	高台付椀	M					B, G	良好		淡緑	5	
17	稜椀	M					B	良好		淡緑	5	
18	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
19	高台付椀	M				7.2	B, D	良好		濃緑	10	
20	高台付椀	M				8.3	B	良好		淡緑	10	
21	高台付椀	M				6.4	B	良好		淡緑	20	
22	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
23	高台付皿	M	15.7	2.3		7.1	B	良好		淡緑（胎土は黄白）	20	被熱
24	高台付皿	M	15.3				B	良好		淡緑	20	
25	稜皿	M	14.7				B	良好		緑	10	
26	稜皿	M	14.4				B	良好		淡緑	20	
27	稜皿	M	14.4				B, D	良好		淡緑	10	
28	稜皿	M	14.4	3.1		7.1	B	良好		濃緑	20	
29	稜皿	M	15.0				B, D	良好		淡緑	10	
30	高台付椀か皿	M					B	良好		淡緑	5	
31	高台付椀か皿	M					B	良好		淡緑	5	
32	高台付椀か皿	M					B	良好		淡緑	5	
33	高台付椀か皿	M					B	良好		淡緑	5	

第652表　緑釉・白磁・黒色土器観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
34	高台付椀か皿	M					B	良好		淡緑	5	
35	高台付椀か皿	M					B	良好		淡緑	5	
36	高台付椀か皿	M					A	良好		淡緑	5	
37	高台付椀か皿	M					B	良好		淡緑	5	
38	高台付椀か皿	M					B	良好		淡緑	5	
39	高台付椀か皿	M					B	良好		淡緑	5	
40	高台付椀か皿	M					B	普通		淡緑	5	
41	高台付椀か皿	M					B	良好		淡緑	5	
42	高台付椀か皿	M					B	良好		淡緑	5	
43	高台付椀か皿	M					B	良好		淡緑	5	
44	高台付皿	M				7.0	B	良好		淡緑	5	
45	高台付皿	M				7.3	B	良好		淡緑	5	
46	高台付皿	M				6.3	B	良好		淡緑	5	
47	高台付皿	M				7.2	C, D	良好		淡緑	5	
48	高台付皿	M				7.6	B	良好		淡緑	5	
49	高台付皿	M				6.2	B	良好		深緑	20	被熱
50	高台付皿	M				7.7	B, D	良好		淡緑	5	
51	高台付皿	M	7.5				B	良好		淡緑	5	
52	小瓶	M					B	良好		淡緑	5	
53	高台付皿	M					B	良好		淡緑	5	
54	高台付皿	M					B	良好		淡緑	5	
55	高台付皿	M					B	良好		淡緑	5	
56	高台付皿	M					B	良好		淡緑	5	
57	高台付皿	M					B, E, F, G	良好		淡緑	5	
58	高台付皿	M					B	良好		淡緑	5	
59	椀	黒色	13.6	3.8		6.5	B, E, G	良好		黄橙	10	
60	椀	黒色				5.9	B, E	良好		黄橙	30	
61	椀	黒色				5.0	B	良好		黄橙	10	
62	椀	黒色					B, E, H	良好		黒褐	5	

ミガキ、黒色処理がみられる。4点とも椀と考えられる。

59は、M－15－4、60は、M－15－4、61は、J－16－1、62は、F－8－1から出土している。

灰釉陶器・緑釉陶器・白磁・黒色土器の中で、墨書の確認される個体について若干記しておきたい。

灰釉陶器第790図6は、高台付椀の底部外面に「平」と墨書がみられる。底部のほぼ中央に書かれている。

同図7は、同じく高台付椀の底部外面に「床」と墨書がみられる。底部の中央やや高台よりに確認できる。

同図8は、底部外面の中央に墨書を確認できたが、判読することはできなかった。

同図33は、高台付椀か皿で、底部外面に「大」と判読できる墨書が確認できた。

第791図58は、底部内面にヘラ記号で、十字を確認することができた。

第793図8では、高台付皿の底部外面に、「南」と判読できる墨書を確認することができた。

同図9は、底部外面中央に「床」と判読できる墨書を確認できた。

緑釉陶器や白磁・黒色土器では、墨書土器は確認できなかった。

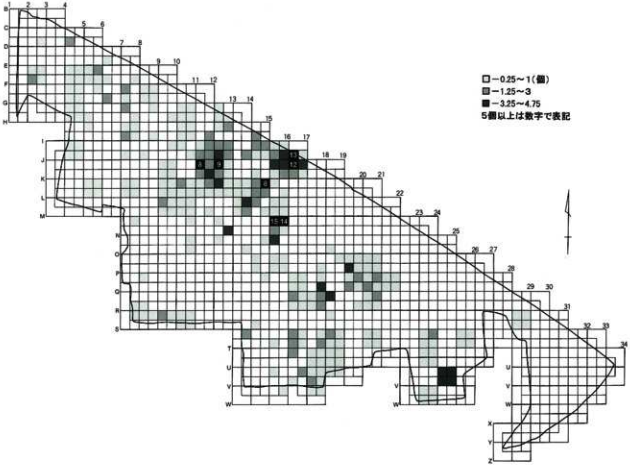
d　長頸壺

分布状況

第796図は、遺物包含層中から出土した長頸壺の分布状況である。なお遺物包含層中から出土した主な長頸壺については、9・10世紀の遺物包含層中の遺物や灰釉陶器とともに掲載した。

長頸壺の分布は調査区中央からやや北側に密に分布

第796図　長頸壺出土分布図



し、以下の５カ所に集中地点がみられる。

第１土壙群を中心とするＪ－16グリッド周辺

区画溝18と区画溝16の接点近くのＪ・Ｋ－11・12グリッド周辺。

区画溝20の西側Ｎ－14・15グリッド周辺。

第199号住居跡東側のＴ－18・19グリッド周辺。

第50号掘立柱建物跡西側のＯ・Ｐ－20グリッド周辺。

５カ所の集中地点のなかで、Ｊ－16グリッド周辺と、Ｎ－14・15グリッド周辺は、遺構が密集し、確認作業に手間取った。グリッド出土遺物の多い一因でもあろう。

しかしそれに比べて、ほかの３カ所は、遺構が比較的薄い場所である。この３カ所に出土が集中する遺物は、ほかに羽口がある（第810図）。

羽口は、破砕後、廃棄された状態で出土したものが多く、鍛冶炉の片づけの行為の結果と考えらる。

仮にそうだとすれば、分布の類似性から長頸壺が、と鉄生産と関係した遺物であった可能性もある。

遺構が密に分布する第１土壙群周辺でも、工房と推定できる第416号土壙で、長頸壺と生産関連遺構の結びつきを推定できる。

e　大甕

大甕は、完形もしくは完形に近く復元できる状態で出土した例は少ない。そのため個体数の把握は、大変困難である。

大甕の個体数の把握には、口縁部の数や、底部の数などを集計する方法があるが、この方法では、小破片と大形破片が、１個と数えられてしまう。

中堀遺跡では、大甕の出土量の多いことが特徴である。それを表すためには、数で示すよりも重量で表す

ことが、理解し易いと考えて、ここでは、重量を計測した。

ちなみに中堀遺跡から出土した大甕の総重量は、1.2トンを計る。仮に大甕一つの重さが、10kgだとすれば120個体があったことになる。

大甕の分布傾向

第797図下は、遺構から出土した大甕の重さを示している。これをみると、出土量の多少はあるが、調査区全体から出土している様子をうかがえる。

やはり、大甕埋設遺構の周辺の遺構から多く出土する傾向がある（第Ⅳ章３－（10）大甕埋設遺構参照）。この傾向は、包含層中の分布状況についてもいえることである。

大甕埋設遺構だけでなく、第217号住居跡の出土例がしめすようにように、いくつかの竪穴住居跡でも大甕が使用されていたと考えられる。

第797図上は、遺物包含層中から出土した大甕の分布状況である。調査区の中央から西側に集中し、東側（南北方向21ラインより東）では、急激に出土量が減少している。

その一方で建物地業跡周辺（Q・R－８～12）や第１・２号掘立柱建物跡周辺（J・K－５～７）では、出土量が少ない。

包含層出土大甕の特徴

包含層中の大甕の焼成は、すべて硬質なＳである。（ＳＫ727の大甕は酸化焔焼成である）。

色調は、青灰色が多いが、灰白色もみられる。また、総じて器肉は厚いが、緻密な胎土で、薄く丁寧につくられている大甕が、ごく少量出土した。

整形は、胴部をタタキ、口縁部はロクロナデによる。タタキ具や当て具は、平行タタキと模様のない当て具の組み合わせを主体としていた（第Ⅳ章３－（１）竪穴住居跡出土土器参照）。

また胴部をタタキ整形後、ハケのような工具で弱くナデた大甕が１例出土した。

第798・799図は、包含層中の大甕である。おもに口縁部を図化した。

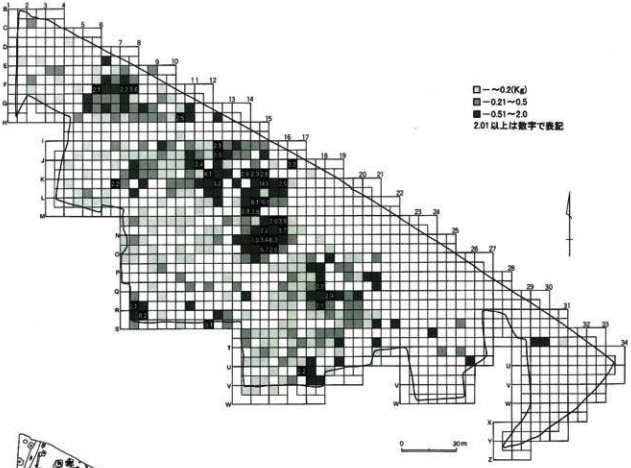
第798図１・２・３・５、第799図10は、波状文を施さない破片である。

ほかの大甕の口縁部には、波状文がみられる。第

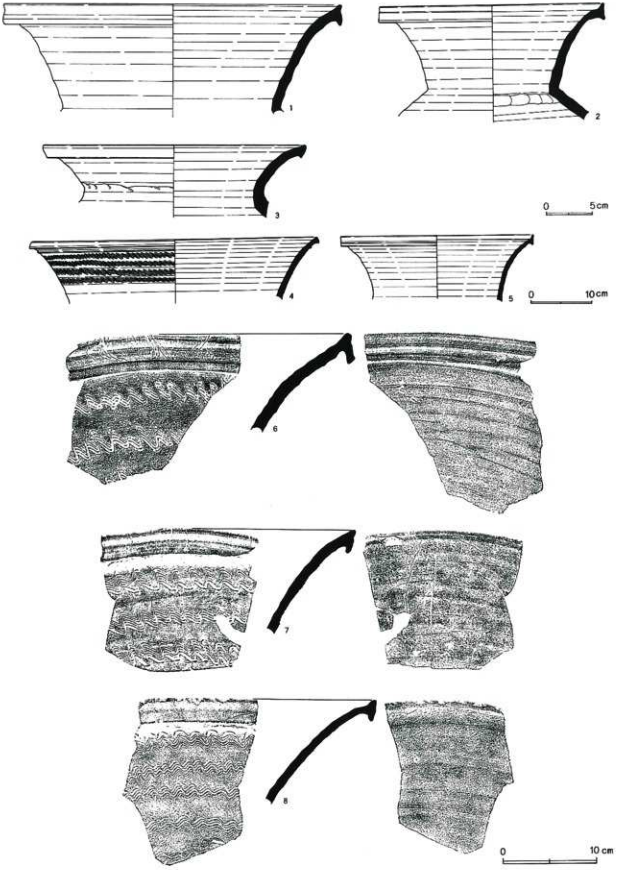
第653表　大甕観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪積	色調	残存	出土位置その他
1	大甕	S	35.7				B	良好		灰	10	
2	大甕	S	23.5				B	良好		灰	20	
3	大甕	S	27.5				A	良好		灰	20	
4	大甕	S	45.0				B, D	良好		青灰	20	
5	大甕	S	30.3				B	良好		青灰	10	
6	大甕	S					B	良好		灰	10	
7	大甕	S					D	良好		青灰	5	
8	大甕	S					B, E, H	良好		青灰	5	
9	大甕	S					B	良好		青灰	5	
10	大甕	S					B	良好		青灰	5	
11	大甕	S					B	良好		青灰	5	
12	大甕	S					B	良好		青灰	5	
13	大甕	S					B	良好		青灰	5	
14	大甕	S					B	良好		青灰	5	
15	大甕	S					B	良好		青灰	5	
16	大甕	S					B, E, G	良好		青灰	5	
17	大甕	S					B	良好		青灰	5	
18	大甕	S					B	良好		青灰	5	
19	大甕	S					B	良好		青灰	5	

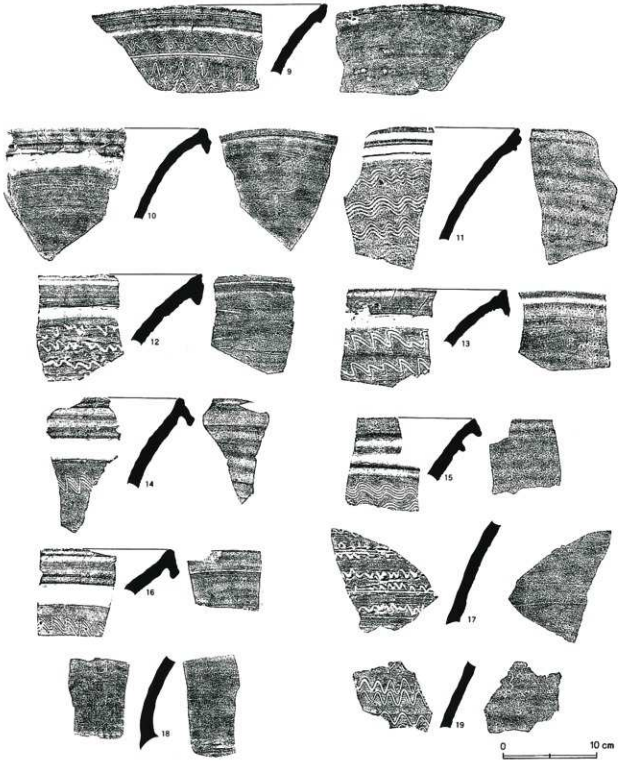
第797図　須恵器大甕破片出土分布図



第798図　グリッド・表採　大甕（1）



第799図　グリッド・表採　大甕（2）



799図の9・17は、数段の波状文の間を沈線で区画するものである。

波状文の多くは、2～数本で構成されているが、第799図12・17・19にみられるように、1本だけの波状文もある。

口縁端部の形状は様々であるが（第Ⅳ章3－（1）竪穴住居跡出土土器参照）、第798図4・第799図15のように端直下に凸帯を巡らす形態もみられた。

f　土錘

第800図は、中堀遺跡から出土した土錘の分布図である。上段は、遺物包含層中から出土した土錘の分布状況、下段は、遺構から出土した土錘の分布状況を表している。

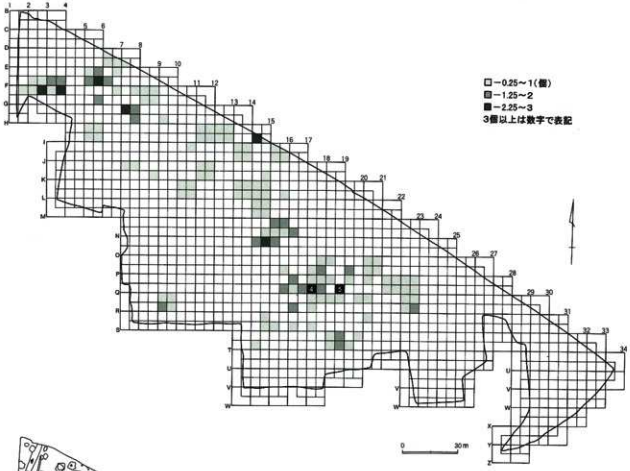
グリッド出土の土錘は、主に調査区内の北西部から中央部にかけてみられた。とくに集中しているのは、中央部である。ここは、大形の掘立柱建物跡である第50号掘立柱建物跡を中心とした場所である。この周辺には、第55号掘立柱建物跡や第43・44号掘立柱建物跡などの遺構が、多数みられる。これらの場所には、土錘がまとまって出土した遺構がいくつかある。

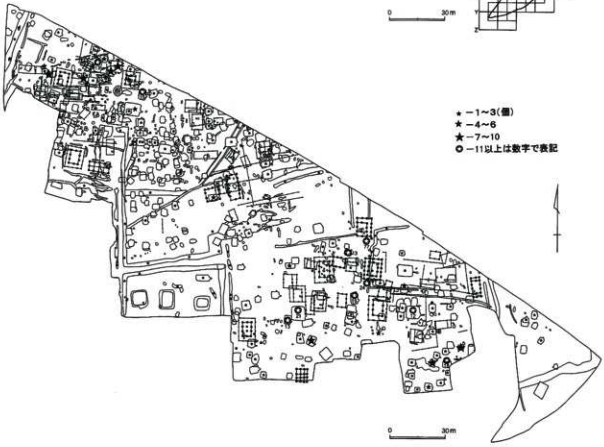
第188号住居跡からは、13個の土錘が出土している。この住居跡は、第50号掘立柱建物跡と第55号掘立柱建

第654表　グリッド出土土錘一覧表（1）

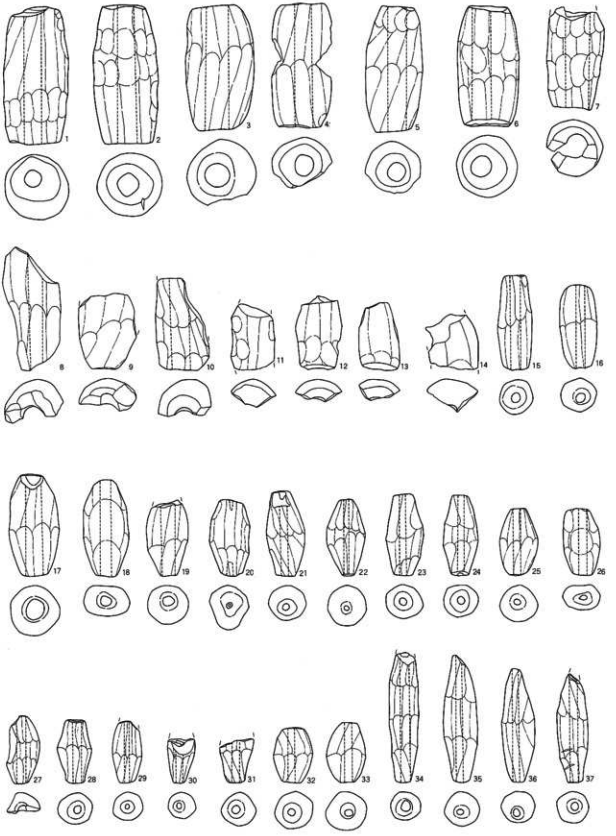
番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
1	にぶい橙	100	7.3	3.4	0.9	98.2	A 1	Ⅰa	29	N－14－2
2	にぶい黄橙	100	7.3	3.5	1.3	91.8	A 1	Ⅰa	30	P－22
3	にぶい橙	80	7.1	3.7	1.3	81.5	A 1	Ⅴa	31	P－18－4
4	橙	40	6.7	3.2	1.2	40.5	A 1	Ⅵb	32	P－21
5	にぶい褐	80	6.7	2.0	1.0	61.8	A 1	Ⅵb	33	P－18－4
6	にぶい橙	100	3.6	3.3	1.1	78.3	A 1	Ⅰa	34	Q－9－3
7	橙	40		3.0	1.3	31.8	A 1	Ⅶa	35	M－15－1
8	にぶい黄橙	30				30.8	A 1	Ⅶ	36	P－16－4
9	にぶい褐	30	4.0			19.8	A 1	Ⅶ	37	S－18
10	にぶい黄橙	30				25.2	A 1	Ⅶ	38	P－17－3
11	にぶい橙	30	3.5			10.4	A 1	Ⅶ	39	Q－18－2
12	褐灰	20				9.5	A 1	Ⅶ	40	I－13
13	にぶい橙	20	3.5			7.4	A 1	Ⅶ	41	O－15－4
14	浅黄	10				12.3	A 1	Ⅶ	42	SJ－8
15	にぶい褐	100	5.0	1.8	0.6	16.5	B 1	Ⅰa	90	E－2－4
16	浅黄橙	100	4.4	1.9	0.5	16.6	B 1	Ⅰa	91	M－15－2
17	にぶい橙	100	5.4	2.6	1.0	38.9	B 1	Ⅰb	92	E－2－4
18	灰白	100	5.2	2.4	0.6	18.9	B 1	Ⅰa	93	K－13
19	にぶい橙	80		2.2	0.6	16.2	B 1	Ⅱa	94	K－13
20	にぶい橙	100	4.0	2.1	0.2	18.0	B 1	Ⅰb	95	I－10－2
21	橙	100	4.5	2.0	0.3	14.6	B 1	Ⅰb	96	O－19－1
22	にぶい橙	100	4.0	2.1	0.3	15.7	B 1	Ⅰa	97	未註記
23	橙	100	4.3	2.0	0.4	13.7	B 1	Ⅰa	98	F－8
24	橙	100	4.3	1.9	0.4	12.5	B 1	Ⅰa	99	G－7－4
25	にぶい褐	100	3.5	2.0	0.4	15.5	B 1	Ⅰa	100	P－17－14
26	橙	100	3.6	2.0	0.4	10.4	B 1	Ⅰa	101	M－15－1
27	灰褐	40	3.6			5.0	B 1	Ⅶ	102	P－17
28	浅黄橙	100	3.4	1.9	0.4	8.1	B 1	Ⅰb	103	T－16－2
29	にぶい橙	90		1.6	0.3	7.5	B 1	Ⅰb	104	U－26－1
30	浅黄橙	30		1.5	0.4	4.2	B 1	Ⅲa	105	P－17
31	黄橙	20		1.9	0.5	5.2	B 1	Ⅳa	106	P－18－4
32	灰黄	100	2.9	2.0	0.4	12.2	B 1	Ⅰa	107	R－17－3
33	浅黄橙	100	3.2	2.2	0.5	13.7	B 1	Ⅰa	108	O－17－2
34	にぶい橙	90		1.6	0.5	16.3	C 1	Ⅰb	302	E－6－3
35	にぶい黄橙	100	6.7	1.9	0.4	19.3	C 1	Ⅰb	303	K－10
36	浅黄橙	80		1.9	0.4	15.7	C 1	Ⅰb	304	E－2
37	灰褐	100		1.7	0.4	13.0	C 1	Ⅰb	305	H－5
38	にぶい橙	100	5.6	2.0	0.6	15.7	C 1	Ⅰb	306	P－18－1
39	にぶい黄橙	100	5.6	1.9	0.4	16.0	C 1	Ⅰa	307	O－20
40	橙	100	5.3	1.8	0.6	13.4	C 1	Ⅰb	308	N－15－1
41	にぶい褐	100	5.7	1.7	0.5	14.2	C 1	Ⅰa	309	H－23－4

第800図　土錘出土分布図

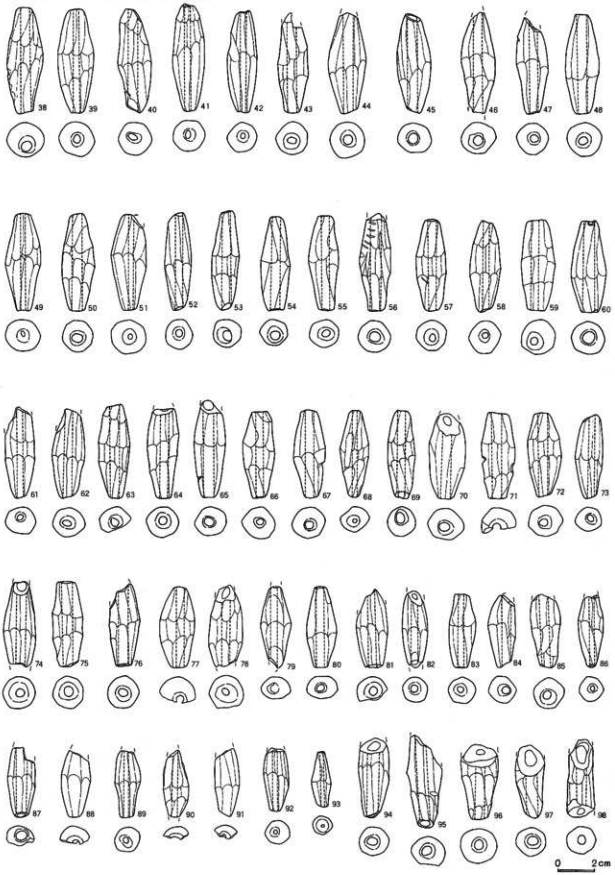




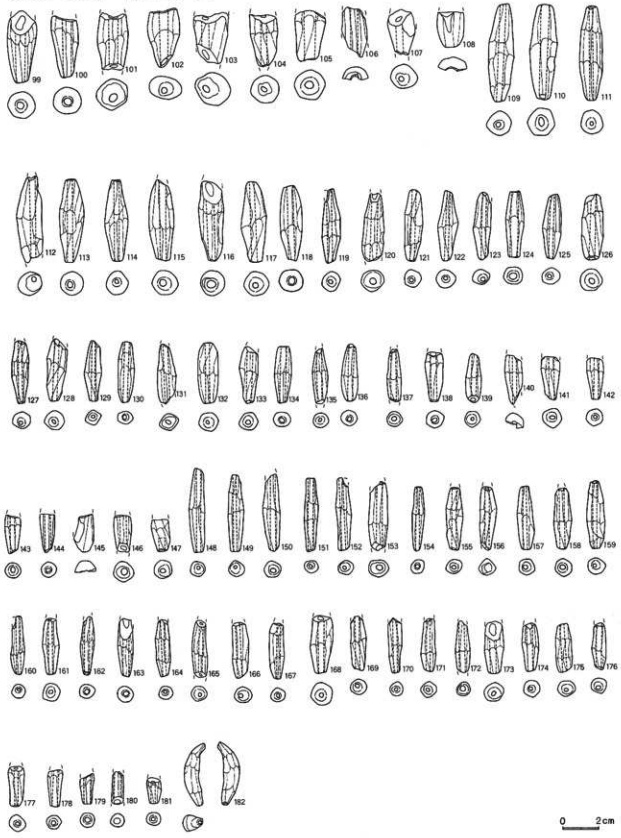
第801図　グリッド・表採　土錘（1）



第802図　グリッド・表採　土錘（2）



第803図　グリッド・表採　土錘（3）



第655表　グリッド出土土錘一覧表 (2)

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
42	にぶい赤褐	100	5.4	1.6	0.3	11.3	C 1	I b	310	Q−22
43	褐灰	90		1.7	0.5	12.8	C 1	II a	311	F−5−4
44	灰赤	80		1.8	0.5	15.8	C 1	II a	312	F−1−2
45	にぶい橙	100	5.2	1.8	0.6	12.0	C 1	I a	313	N−14−1
46	浅黄	95		1.9	0.5	13.4	C 1	I c	314	SJ−45
47	浅黄橙	80		1.7	0.5	11.1	C 1	I b	315	G−7−1
48	浅黄橙	100	5.3	1.9	0.5	14.4	C 1	I a	316	K−14
49	褐灰	100	5.2	1.8	0.2	13.4	C 1	I a	317	F−7−2
50	にぶい褐	100	5.2	1.7	0.6	12.3	C 1	I a	318	E−3−2
51	にぶい褐	95	5.2	1.9	0.3	14.8	C 1	I b	319	G−9−3
52	橙	100	5.2	1.5	0.4	9.0	C 1	I a	320	N−15−1
53	にぶい黄橙	100	5.2	1.5	0.5	9.8	C 1	I a	321	SJ−42
54	浅黄橙	95	4.9	1.5	0.6	9.5	C 1	I b	322	SJ−45
55	にぶい黄橙	100	5.0	1.6	0.4	10.4	C 1	I a	323	G−7−1
56	にぶい褐	80		1.7	0.6	11.4	C 1	II b	324	E−3−4
57	にぶい黄橙	100	4.9	1.7	0.3	10.5	C 1	I a	325	E−6−3
58	橙	100	4.9	1.7	0.4	10.7	C 1	I a	326	S−18−4
59	浅黄橙	100	4.1	1.9	0.4	16.0	C 1	I a	327	Q−9
60	にぶい橙	100	4.9	1.8	0.7	12.1	C 1	I b	328	F−8, 風倒木
61	にぶい橙	70		1.7	0.3	9.6	C 1	II a	329	P−20−1
62	にぶい橙	70	4.7	1.8	0.4	10.2	C 1	II b	330	E−5
63	にぶい橙	70	5.0	1.7	0.5	9.6	C 1	VII a	331	SJ−45
64	灰黄褐	70		1.8	0.4	11.4	C 1	I b	332	SJ−42
65	浅黄橙	70		1.7	0.5	11.1	C 1	I b	333	SJ−45
66	浅黄	100	4.6	1.9	0.4	13.1	C 1	I a	334	SJ−77
67	にぶい黄橙	100	4.6	1.8	0.5	10.4	C 1	I c	335	SJ−45
68	浅黄橙	90	4.6	1.6	0.3	6.6	C 1	I b	336	Q−19−2
69	にぶい黄橙	100	4.7	1.5	0.5	9.2	C 1	I b	337	SJ−45
70	浅黄橙	70		1.9	0.5	13.8	C 1	II a	338	J−8−4
71	にぶい黄橙	50	4.6	1.8	0.5	8.4	C 1	VII	339	P−16−1
72	にぶい橙	100	4.5	1.8	0.5	11.7	C 1	I a	340	M−15−2
73	にぶい赤褐	100	4.5	1.4	0.4	6.8	C 1	I c	341	H−14−3
74	橙	70		1.7	0.5	10.7	C 1	II b	342	F−8, 風倒木
75	にぶい橙	100	4.5	1.6	0.5	11.9	C 1	I a	343	J−11
76	浅黄	70		1.8	0.5	10.7	C 1	II a	344	SJ−45
77	にぶい橙	50	4.3	1.9	0.4	8.7	C 1	VII	345	P−17
78	にぶい橙	70		1.9	0.4	12.6	C 1	VII	346	J−7−1
79	橙	80		1.6	0.4	5.8	C 1	I c	347	O−17−3
80	浅黄橙	100	4.3	1.7	0.5	7.5	C 1	I b	348	O−17−2
81	にぶい黄橙	50			0.4	7.7	C 1	VII	349	E−3−1
82	灰黄褐	70		1.3	0.4	6.8	C 1	I c	350	P−18−4
83	浅黄橙	100	3.8	1.5	0.4	6.4	C 1	I a	351	P−17−3
84	橙	100	3.8	1.4	0.5	6.5	C 1	II a	352	P−17−3
85	灰黄褐	60		1.6	0.4	8.3	C 1	II b	353	E−5−3
86	褐灰	80		1.3	0.2	5.4	C 1	II a	354	未註記
87	褐灰	40		1.4	0.6	3.8	C 1	V a	355	未註記
88	にぶい橙	30				4.2	C 1	VII	356	H−14
89	明褐灰	80		1.4	0.3	4.9	C 1	II a	358	表採
90	橙	20				2.6	C 1	VII	357	未註記
91	にぶい褐	40	4.7			2.2	C 1	VII	359	H−14
92	にぶい橙	70		1.8	0.2	4.7	C 1	II a	360	M−15−3
93	褐灰	100	2.9	1.1	0.2	2.4	C 1	II b	361	I−13
94	褐灰	60		1.6	0.6	8.8	C 1	II b	362	E−5−4

第656表　グリッド出土土錘一覧表（3）

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
95	浅黄橙	60		1.8	0.5	10.8	C 1	Ⅱ b	363	SJ－45
96	にぶい橙	50		2.0	0.5	11.3	C 1	Ⅲ a	364	P－18－4
97	にぶい褐	50		1.6	0.6	6.6	C 1	Ⅲ b	365	E－6－2
98	にぶい褐	40		1.6	0.4	8.2	C 1	Ⅲ b	366	SJ－42
99	にぶい橙	40		1.5	0.4	6.4	C 1	Ⅲ a	367	E－5－4
100	にぶい褐	50		1.5	0.4	5.7	C 1	Ⅲ a	368	E－3－4
101	褐灰	40		1.7	0.4	8.0	C 1	Ⅷ	369	E－2
102	にぶい赤褐	100	3.0	1.8	0.3	6.4	C 1	Ⅲ b	370	O－18－1
103	にぶい赤褐	30		1.9	0.5	7.6	C 1	Ⅳ b	371	G－7
104	浅黄橙	20		1.5	0.3	5.4	C 1	Ⅲ b	372	R－20－1
105	にぶい黄橙	30		1.6	0.5	4.5	C 1	Ⅲ a	373	Q－20－1
106	にぶい褐	10				2.0	C 1	Ⅶ	374	E－3
107	橙	30		1.4	0.3	3.8	C 1	Ⅳ b	375	H－12
108	明赤褐	10				1.8	C 1	Ⅶ	376	I－15
109	橙	100	5.2	1.4	0.2	7.2	C 2	Ⅰ b	597	J－14－4
110	浅黄	100	5.0	1.5	0.5	9.6	C 2	Ⅰ a	598	J－7－2
111	にぶい褐	100	5.0	1.3	0.2	6.9	C 2	Ⅰ b	599	SD－11, H－7
112	橙	80		1.3	0.2	6.2	C 2	Ⅰ c	600	R－16－3
113	橙	100	4.4	1.3	0.4	6.1	C 2	Ⅰ a	601	U－16－3
114	にぶい褐	100	4.4	1.2	0.3	4.9	C 2	Ⅰ a	602	U－16－3
115	にぶい褐	90		1.4	0.4	6.4	C 2	Ⅰ b	603	H－14－3
116	褐灰	60		1.3	0.5	6.1	C 2	Ⅲ b	604	H－11
117	褐灰	100	4.3	1.4	0.3	6.4	C 2	Ⅰ a	605	P－16－4
118	にぶい橙	100	4.0	1.2	0.4	5.2	C 2	Ⅰ a	606	G－7－2
119	褐灰	100	3.9	1.0	0.2	3.0	C 2	Ⅰ c	607	V－15－1
120	灰白	70		1.2	0.4	2.0	C 2	Ⅱ b	608	F－6－2
121	浅黄橙	90	3.8	0.9	0.2	2.7	C 2	Ⅰ c	609	V－15－1
122	にぶい橙	100	3.7	1.1	0.2	2.4	C 2	Ⅰ b	610	V－15－1
123	にぶい橙	100	3.6	0.9	0.2	2.3	C 2	Ⅰ c	611	V－15－1
124	褐灰	100	3.5	1.0	0.4	2.9	C 2	Ⅰ b	612	D－6
125	浅黄橙	100	3.5	1.0	0.2	2.4	C 2	Ⅰ a	613	V－15－1
126	橙	90	3.4	1.2	0.3	4.4	C 2	Ⅱ b	614	R－14－2
127	にぶい黄橙	80		0.9	0.2	1.8	C 2	Ⅱ a	615	V－15－1
128	にぶい橙	70		1.1	0.3	2.6	C 2	Ⅱ a	616	V－15－1
129	にぶい橙	100	3.2	0.9	0.2	1.7	C 2	Ⅰ b	617	T－19－1
130	にぶい黄橙	100	3.2	0.8	0.3	1.7	C 2	Ⅰ a	618	E－5－2
131	褐灰	80		1.1	0.3	2.1	C 2	Ⅱ b	619	F－5－4
132	褐灰	100	3.2	1.1	0.2	3.6	C 2	Ⅰ a	620	D－7
133	褐灰	60		1.0	0.3	2.4	C 2	Ⅲ b	621	V－15－1
134	にぶい橙	100	3.0	0.9	0.3	1.8	C 2	Ⅱ a	622	Y－13, 14
135	橙	80		0.8	0.2	1.3	C 2	Ⅰ b	623	S－19－3
136	にぶい褐	100	3.0	0.9	0.3	1.6	C 2	Ⅱ a	624	M－15－4
137	にぶい褐	70		0.8	0.3	1.5	C 2	Ⅱ b	625	M－14－4
138	灰黄	40		1.0	0.3	2.0	C 2	Ⅱ b	626	V－15－1
139	にぶい褐	100	2.7	0.8	0.2	1.4	C 2	Ⅲ b	627	T－16－4
140	褐灰	20	2.6			1.3	C 2	Ⅶ	628	O－19－1
141	にぶい橙	30		1.0	0.3	1.7	C 2	Ⅲ b	629	V－15－1
142	橙	40		0.9	0.9	1.5	C 2	Ⅲ a	630	I－8－1
143	明褐	30		0.8	0.3	1.0	C 2	Ⅷ	631	N－14－2
144	明赤褐	30		0.8	0.3	1.0	C 2	Ⅲ b	632	N－14－2
145	橙	10		1.1	0.1	1.3	C 2	Ⅶ	633	未註記
146	にぶい黄橙	20		1.1	0.3	2.1	C 2	Ⅷ	634	R－14－4
147	褐灰	30		1.0	0.2	1.6	C 2	Ⅳ a	635	P－17

第657表　グリッド出土土錘一覧表（4）

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
148	にぶい橙	100	4.4	0.8	0.2	2.9	C 3	Ⅰa	729	N−14−1
149	橙	100	4.1	0.9	0.2	2.1	C 3	Ⅰb	730	G−17−1
150	にぶい橙	90		0.9	0.3	2.8	C 3	Ⅱb	731	P−15−4
151	橙	100	3.9	0.8	0.2	1.3	C 3	Ⅰb	732	U−28
152	にぶい褐	100	3.8	0.9	0.2	1.9	C 3	Ⅰb	733	S−18−2
153	浅黄橙	80		1.0	0.4	3.2	C 3	Ⅱa	734	Q−22−4
154	にぶい黄橙	100	3.4	0.7	0.2	1.2	C 3	Ⅰa	735	D−16−3
155	黄橙	90		0.9	0.2	1.8	C 3	Ⅰc	736	M−16−3
156	浅黄橙	80		0.9	0.2	2.2	C 3	Ⅱb	737	S−19−2
157	浅黄橙	100	3.3	0.9	0.2	2.3	C 3	Ⅰb	738	T−17−2
158	にぶい黄橙	90		0.9	0.3	2.0	C 3	Ⅰc	739	V−15−1
159	灰黄	100	3.6	1.0	0.2	2.3	C 3	Ⅰb	740	V−15−1
160	にぶい橙	90	3.2	0.7	0.2	1.3	C 3	Ⅰb	741	K−15−4
161	にぶい橙	90		1.0	0.2	2.2	C 3	Ⅱa	742	O−17−4
162	にぶい褐	90		0.8	0.2	1.5	C 3	Ⅱa	743	U−26−1
163	にぶい黄橙	60		0.7	0.3	1.8	C 3	Ⅰb	744	L−14
164	浅黄橙	90		0.8	0.2	1.4	C 3	Ⅰc	745	U−17−2
165	にぶい橙	70		0.9	0.1	2.0	C 3	Ⅱb	746	P−17−4
166	浅黄橙	70		0.9	0.2	2.0	C 3	Ⅰc	747	O−19−3
167	にぶい橙	80		0.8	0.2	1.4	C 3	Ⅱb	748	P−15−4
168	浅黄橙	50		1.2	0.2	3.9	C 3	Ⅱb	749	R−15−3
169	褐灰	80		0.9	0.2	1.8	C 3	Ⅱb	750	V−18−1
170	にぶい褐	50		0.7	0.2	1.5	C 3	Ⅱa	751	T−10−3
171	橙	60		0.9	0.2	1.5	C 3	Ⅰc	752	T−17−4
172	にぶい橙	40		0.7	0.3	1.0	C 3	Ⅷ	753	H−14
173	橙	30		1.1	0.3	2.3	C 3	Ⅲb	754	M−16−3
174	にぶい黄橙	60		0.9	0.2	1.7	C 3	Ⅱa	755	V−24
175	黄橙	100	2.6	0.9	0.2	1.8	C 3	Ⅰa	756	O−17−4
176	浅黄橙	60		0.8	0.3	1.2	C 3	Ⅱb	757	N−16−1
177	橙	40		0.9	0.2	1.3	C 3	Ⅱb	758	Q−18−1
178	にぶい褐	40		0.8	0.2	1.0	C 3	Ⅱa	759	T−16−2
179	にぶい橙	20		0.8	0.3	0.8	C 3	Ⅳa	760	P−16−3
180	にぶい褐	20		0.7	0.4	0.7	C 3	Ⅲa	761	P−16−1
181	にぶい褐	20		0.8	0.2	0.7	C 3	Ⅳa	762	S−14−3
182	橙	100	3.3		0.2	2.2	C 4	Ⅰa	763	未註記

物跡の中間に近い所に位置する。また、第55号掘立柱建物跡の周辺部には、第631号土壙、第223号住居跡がある。これらの遺構からは、それぞれ24個と12個の土錘が出土した。第44号掘立柱建物跡の周辺部には、第197・198号住居跡がある。ここからは、土錘がそれぞれ22個と13個出土した。

その他に土錘が多く分布している場所は、中央部では、第199号住居跡の周辺部、第166・167号住居跡の周辺部、第37号掘立柱建物跡の周辺部がある。第199号住居跡からは、7個の土錘が出土した。また北西部では、第53・54号住居跡の周辺部、第22号土壙の周辺部、第31号住居跡の周辺部である。ここからは土錘が13個出土した。

第801図～第803図は、遺物包含層中の主な土錘である。182個出土した。重さは、1gに満たないものから90gを超えるものまで、さまざまである。

1～14は、円筒状の土錘である。中堀遺跡の土錘の中では大形である。1・2・6は完形である。1は重さ98.2g、長さ7.3cm、2は91.8g、7.3cm、6は78.3g、3.6cmである。

15～33は、中心部がふくらみ、端がすぼまる形状部をしている。15～18・20～26・28・32・33は完形であ

る。これら完形の土錘の重さは8.1～38.9g、長さは2.9～5.4cmである。

34～181は、管状の土錘である。そのうち34～108は、中心部がふくらみ端部がすぼまる形状をしている。グリッド出土の土錘の中で最も多い形状である。35・37～42・45・48～50・52・53・55・57～60・66・67・69・72・73・75・80・83・93は完形である。これらは、重さ2.4～19.3g、長さ2.9～6.7cmである。

109～147は、中心部がややふくらむ形状をしている。端部との径の差が小さい。109～111・113・114・117～119・122～125・129・130・132・134・136・139は完形である。これらは、重さ1.4～9.6g、長さ2.7～5.2cmである。

148～181は、ストローのように細長い形状をしている。中心部と端部の径の差はほとんどない。148・149・151・152・154・157・159・175は完形である。これらは、重さ1.2～2.9g、長さ2.6～4.4cmである。

182は、中心部がややふくらみ、端部がすぼまる管状の形状をしているが、三日月状に曲がっている。重さは2.2g、長さは3.3cmである。完形である。

g　平瓦・丸瓦

平瓦の分布状況

第804図は、遺物包含層中から出土した平瓦の分布状況である。平瓦の出土は、第12号区画溝に囲まれた範囲に集中していた。

ことに第3号建物地業跡の南北の軒先にあたる部分から多量に出土した。このことは、三棟の建物地業跡の内、少なくとも第3号建物跡は、瓦葺き建物跡であった可能性を示唆している。

また砂利採集で削平された南にも建物跡が予想され、建物の屋瓦としての出土といえよう。また調査区の東側に向かって、薄いながらもやや平瓦の破片が出土した。

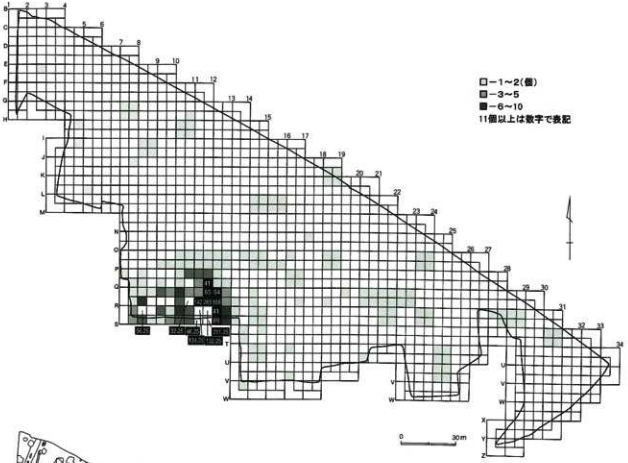
第806図15から第808図65は、遺物包含層中から出土した主な平瓦である。

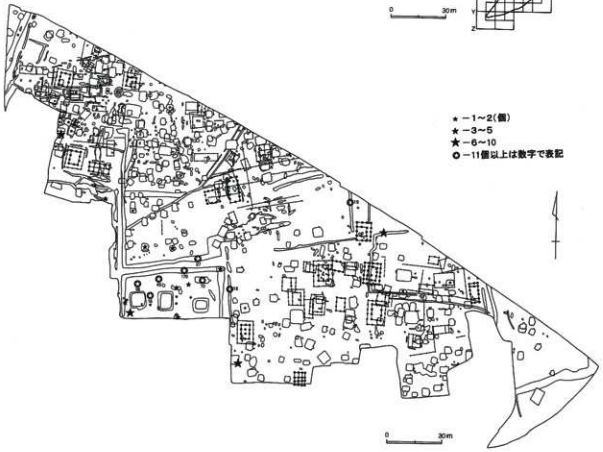
15・16は、上左隅部の破片である。17から19は、上

第658表　グリッド出土瓦一覧表（1）

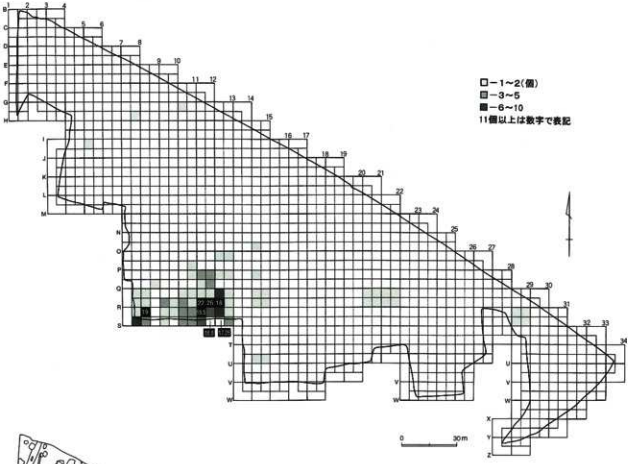
番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
1	軒丸瓦	酸化炎	瓦当	布	－
2	軒平瓦	中間	刷り消し	布	－
3	軒平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
4	軒丸瓦	酸化炎	瓦当	布	－
5	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
6	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
7	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
8	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
9	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
10	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	－
11	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
12	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
13	丸瓦	中間	刷り消し	布	－
14	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	－
15	平瓦	酸化炎	縄タタキと刷り消し	布	2面面取り
16	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
17	平瓦	酸化炎	平行タタキと刷り消し	布	2面面取り
18	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
19	平瓦	還元炎	刷り消し	布	2面面取り
20	平瓦	酸化炎	平行タタキと刷り消し	布	1面面取り
21	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
22	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
23	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
24	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
25	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
26	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
27	平瓦	還元炎	放し砂	布	－
28	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
29	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
30	平瓦	酸化炎	平行タタキと刷り消し	布	1面面取り
31	平瓦	酸化炎	平行タタキと刷り消し	布	1面面取り
32	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
33	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
34	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
35	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
36	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
38	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
39	平瓦	酸化炎	縄タタキと刷り消し	布	1面面取り
40	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
41	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
42	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
43	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
44	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
45	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
46	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
47	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
48	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
49	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－

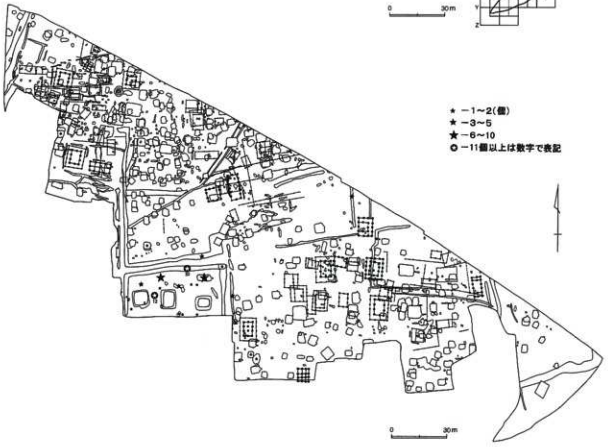
第804図　平瓦出土分布図



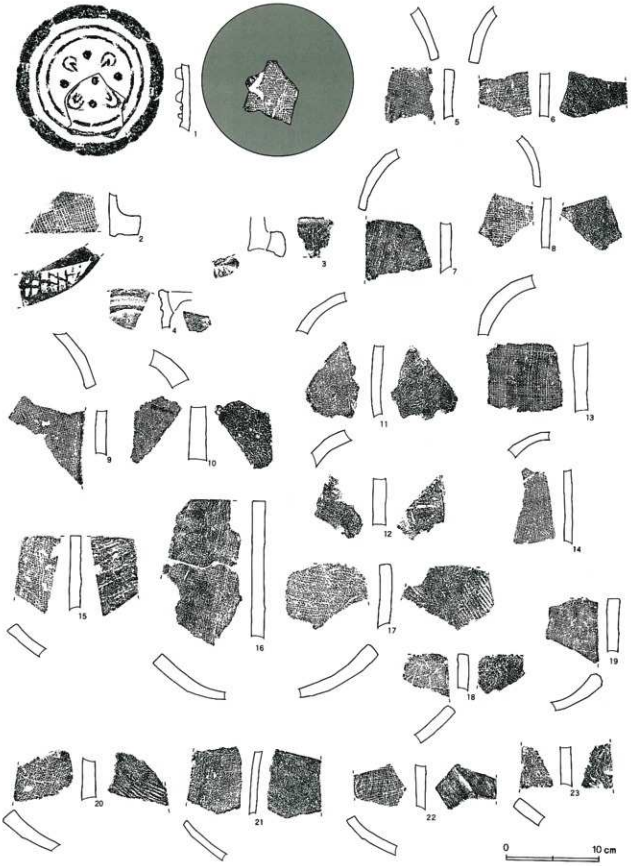


第805図　丸瓦出土分布図

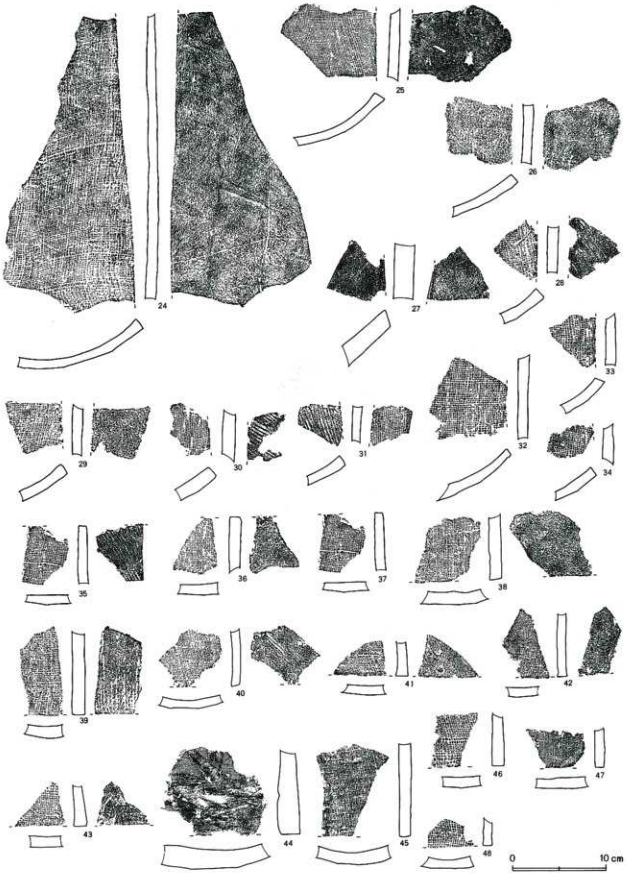




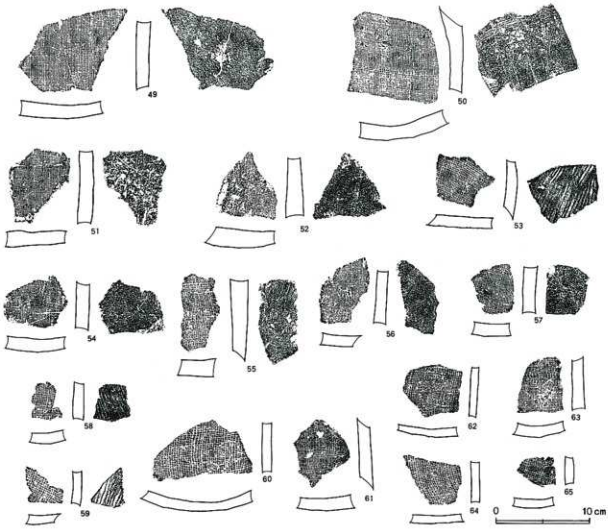
第806図　グリッド・表採　瓦（1）



第807図　グリッド・表採　瓦（2）



第808図　グリッド・表採　瓦（3）



右隅部の破片である。

20から23は、左側片部の破片である。24から34は、右側片部の破片である。

35から37は、上端部の破片である。38から48は、下端部の破片である。

49から65は、端部がみられないが、やや大きい破片を掲載した。

丸瓦の分布状況

第805図は、遺物包含層中からの丸瓦の分布状況である。

平瓦同様、丸瓦は、第12号区画溝に囲まれた範囲から集中して出土した。やはり第3号建物地業跡からの出土が多く、他は散漫である。

第659表　グリッド出土瓦一覧表（2）

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
50	平瓦	中間	刷り消し	布	－
51	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
52	平瓦	還元炎	刷り消し	布	－
53	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
54	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
55	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
56	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
57	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
58	平瓦	還元炎	刷り消し	布	－
59	平瓦	酸化炎	平行タタキと刷り消し	布	－
60	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
61	平瓦	酸化炎	平行タタキと刷り消し	布	－
62	平瓦	中間	刷り消し	布	－
63	平瓦	還元炎	刷り消し	布	布
64	平瓦	中間	刷り消し	布	布
65	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－

また砂利採集で削平された南にも建物跡が予想され、ここに葺かれていた屋瓦である可能性も予測できる。

第806図5から同図14は、遺物包含層中から出土した主な丸瓦である。

5は、上右隅部の破片である。

6・7は、左側部の破片である。8・9は、右側部の破片である。

10から14は、端部はみられないが、やや大きな破片を掲載した。

軒瓦については、分布図を掲載しなかったが、平瓦・丸瓦の分布状況と、ほとんど同様の傾向であった。

第806図1・4は、軒丸瓦である。

同図2・3は、軒平瓦である。

軒瓦の詳細は、後述する。

h　フイゴ羽口

フイゴの羽口の特徴

フイゴの羽口は総数1,358点出土した。フイゴの羽口はその使用方法の性格上残存状態は極めて悪く、ほとんどが小破片となっている。

第809図は、そのうち残存状況が良好ものである。1は太く、送風孔の径も大きいものである。2は太さは1と変わらないが、送風孔が小さい。3は1・2に比べて細く、送風孔も小さい。

特に1は完形品で、これ以上短くなると窯壁の厚さより短くなることから廃棄されたものと思われ、窯壁の厚さが推定できる資料である。

いずれも、炉内に出ていた部分は、高熱により溶解し、鉄滓が付着している。溶解部の外側は還元化している。

フイゴの羽口の分布

第810図上は包含層中の分布を示し、下は遺構からの出土状況を表している（第Ⅳ章3－（9）鍛冶炉跡、第Ⅴ章鉄滓参照）。

フイゴ羽口が集中するのは、第3号建物地業跡の南東の第13号区画溝付近（R－12・13）、第1号井戸南西付近（G－7）、第50号掘立柱建物跡南西付近（Q－17）、第1・3土壙群周辺（I－16・17、S－23・24）である。

これらの集中地点は、付近に鍛冶炉跡が検出されている例が多い。

第3号土壙群の北側には、第15・16・17号鍛冶炉が検出され、土壙群内からも鉄滓とともに、焼土・炭化物・窯壁などが出土した。

G－7グリッドの南側には第3・4・5号鍛冶炉跡が検出された。

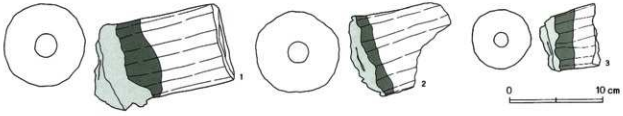
建物地業跡を含む、第13号区画溝の区画内には、鍛冶工房（第138号住居跡）や第14号鍛冶炉跡が検出された。

また、第13号区画溝の北側にある第12号区画溝内からは、第6～12号鍛冶炉跡が検出されていて、区画溝内から多量のフイゴ羽口が出土した。

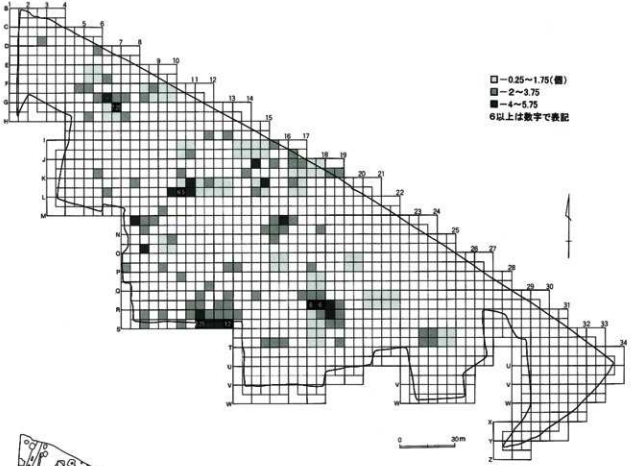
以上のように、周辺に鍛冶炉跡が検出されているものがある一方で、第50号掘立柱建物跡の南西に位置するQ－16・17、R－17・18グリッドでは周辺に鍛冶炉跡は検出されていない。

このQ－16・17グリッドからは、供膳具などが多量

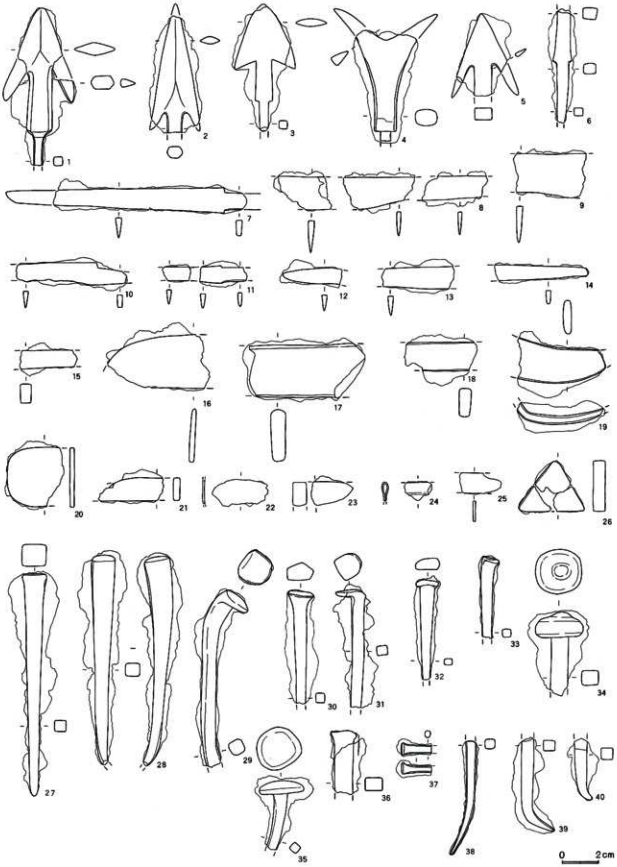
第809図　グリッド　羽口



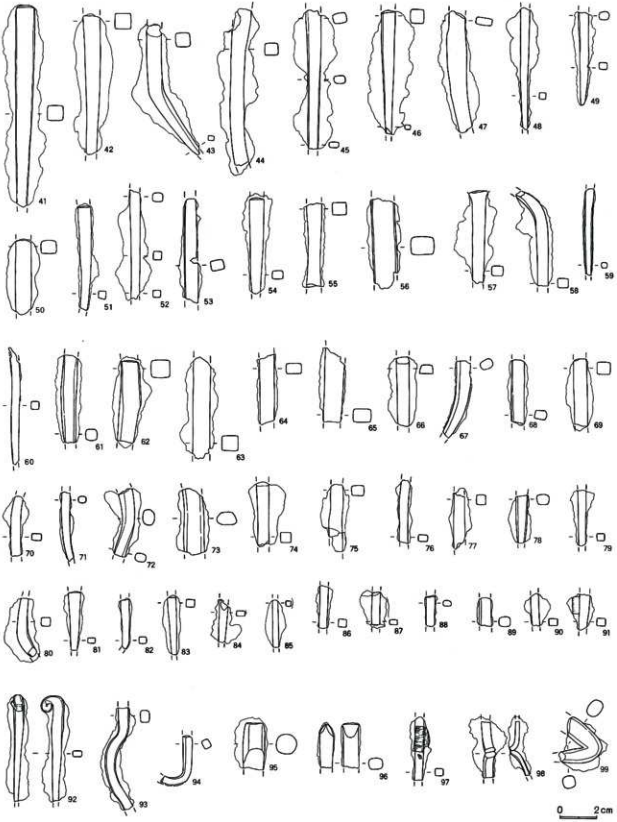
第810図　フイゴ・羽口出土分布図



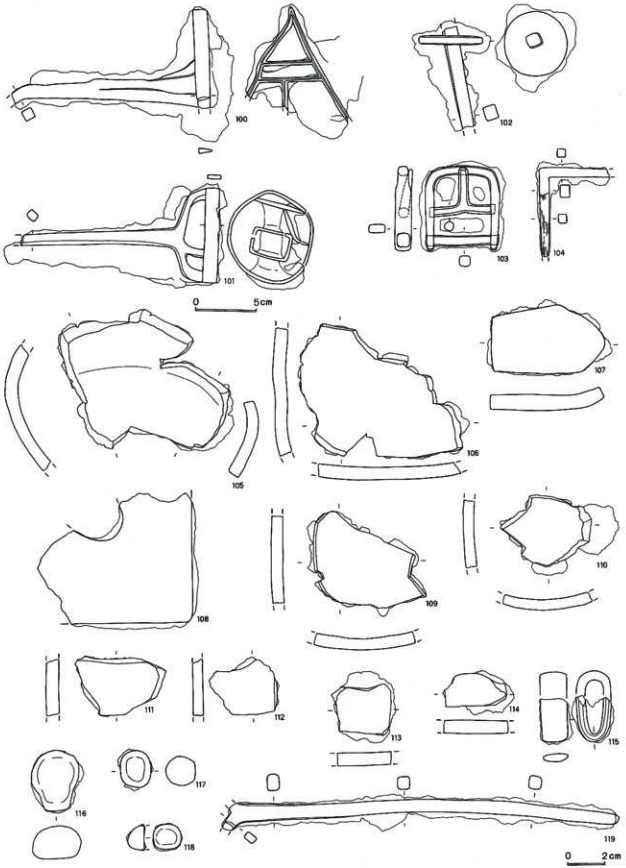
第811図　グリッド・表採　鉄（1）



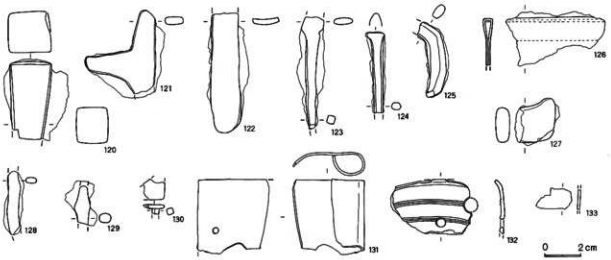
第812図　グリッド・表採　鉄（2）



第813図　グリッド・表採　鉄（3）



第814図　グリッド・表採　鉄（4）



の焼土とともに出土している。おそらく鍛冶工房のかたずけに伴う廃棄行為と考えられる。この土器の中には長頸壺も多く出土しており、製鉄遺構との関連が予想される。

i　金属製品

第811図～第814図は包含層中から出土した金属製品である。個々の金属製品については、第Ⅴ章1－(10)の一覧表（第695表～第705表）金属製品を参照されたい。

ここでは金属製品の品名と出土位置を述べるが、不明鉄製品については記述を省略した。

第811図の1～6は鉄鏃である。1はL－14、2はI－12、3はU－14、5はI－9グリッドから出土した。4は表採である。

7～14は刀子である。7はL－15、8はF－8、9はR－22、10はR－9、13はF－8グリッドから出土した。11・12・14は表採である。

15は棒状金具である。T－18グリッドで出土した。

16～21・25は延板状金具である。16はG－10、17・18R－22、19はN－11、20はT－18、25はO－11グリッドで出土した。21は表採である。

22・23・26は板状金具である。22はJ－8、23はS－15、26はR－22グリッドで出土した。

27～41は釘である。27はR－8、28はQ－10、29はR－12、30はN－8、31はR－12、32はE－6、33はH－4、35はR－11、36はQ－12、37・38はJ－14、39はQ－12、40はI－14グリッドで出土した。34は表採である。

第812図41・42・44・45・48・50・52・53・55・56・58～70・72～77・79・80・82・84～91・93～95・97～99は棒状金具である。41・4はR－8、44はR－12、45はP－20、48はE－7、50はE－8、52はP－12、53はQ－18、55はJ－14、56はO－10、58はQ－26、59はI－5、60はP－11、61はK－8、62はJ－14、63はG－10、64はD－5、65はH－9、67はH－6、68・70はN－16、72はQ－16、73はR－18、74はE－7、76はR－18、77はS－29、79はE－7、80はP－20、82はK－6、84はE－7、86はE－7、88はR－20、89はJ－9、90・91・93はE－7、94はQ－9、95はJ－13、97・98はE－7、99はS－15グリッドで出土した。66・69・75・85は表採である。

47は延板状金具である。E－7グリッドで出土した。

43・46・49・51・54・57・71・78・81・83・92は釘である。43はR－14、46はP－20、49はF－9、51はK－14、54はO－19、57はJ－16、71はT－14、78はJ－13、81はN－13、83はF－8、92はR－11で出土した。

100・101は焼印である。ともに表採である。102は紡錘車である。102はQ－9グリッドで出土した。

103は鉸具である。Ｉ－15グリッドで出土した。

104は鎹である。Ｅ－７グリッドで出土した。

105・106・109～114は鉄鍋である。すべてＪ－10グリッドで出土した。

107・108は板状金具である。107はＲ－16、108はＮ－９グリッドで出土した。

115は刀装具（鍔）である。表採である。

116～118は鉄塊である。116はＦ－７グリッドで出土した。117・118は表採である。

第813図122・127は延板状金具である。122はＰ－19、127はＳ－15グリッドで出土した。

124は釘である。表採である。

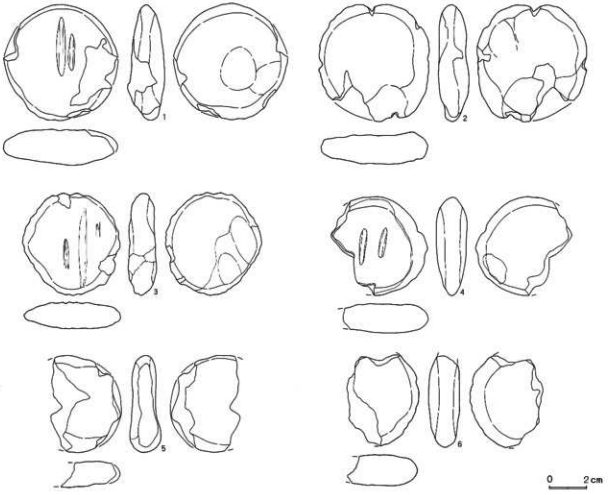
129は棒状金具である。Ｏ－８グリッドで出土した。

第813図131・132・133は青銅製品である。

131は刀装具である。Ｊ－９グリッドで出土した。

132は火のしである。Ｒ－８グリッドで出土した。

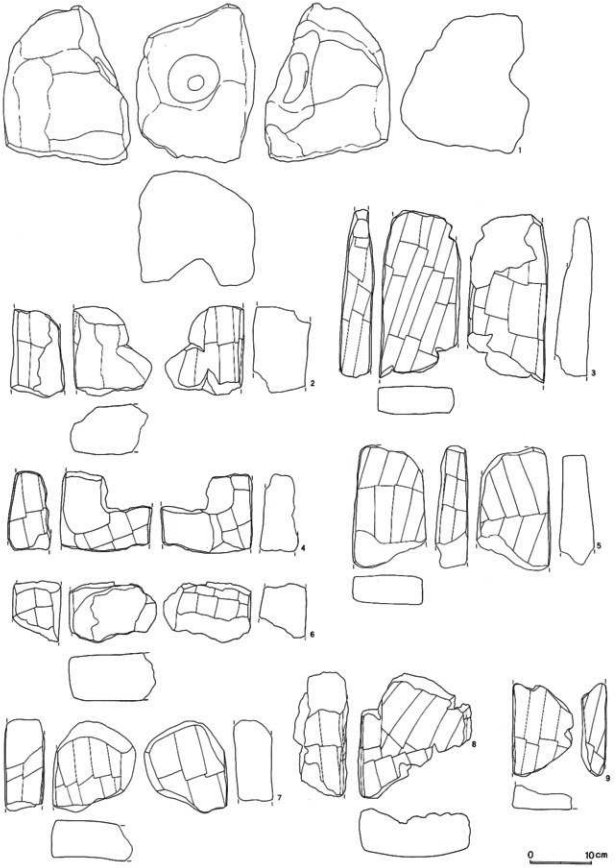
第815図　グリッド・表採　円板状土製品



第660表　円板状土製品一覧表

グリッド	図版番号	色調	大きさ	最大厚	重さ（g）	備考
Ｏ－１０	1	明赤褐	6.1×6.0	1.9	54	よしず状圧痕・全体的に被熱
Ｉ－１２－２	2	明褐	6.3×6.2	1.6	50	全体的に被熱
Ｋ－８－４	3	明赤褐	5.2×5.4	1.4	36	よしず状圧痕・全体的に被熱
Ｑ－９－１	4	明赤褐	5.3×(5.2)	1.6	35	よしず状圧痕・全体的に被熱
Ｑ－９－１	5	橙	5.2×(5.2)	1.6	22	全体的に被熱
Ｑ－９－１	6	明赤褐	(径5.5)	1.7	28	全体的に被熱

第816図　グリッド・表採　切石



j　円板状土製品

用途不明の土製品である。鍛冶工房である第138号住居跡から主に出土しているが、包含層中からも6点出土している（第815図）。

包含層中からも第138号住居跡に近いQ－9グリッドから多く出土した。

k　切石

カマドの袖などに使用していたと思われる、加工痕跡のある石が包含層中からも出土した。

第816図1は大型の川原石を大きく割り、荒く面取りを行った後に、ほぞ孔のような窪みを設けている。表採資料で用途は不明である。

2～9は凝灰岩である。遺構からの出土状況から、住居跡のカマドの袖に補強材として使用されるものが多かったと考えられる。

4はL－13グリッドから、6はF－8グリッド、7はJ－10グリッド、8はT－18グリッドから出土した。他のものは表採である。

l　置きカマド

形状や大きさは復元はできないが、置きカマドと思われる破片が出土した。

第817図1・2・4は掛け口の破片と思われる。いずれも酸化焔で焼きは甘く、胎土が粉っぽく手に付く。

胎土中には角閃石・砂粒を含む。整形はユビナデ整形であり、1の内面にはヘラナデもみられる。

3は焚き口の周囲に付く鍔の破片と思われる。酸化焔焼成であるが、焼きは1から3に比べて良く、硬質な感じである。

ユビオサエ後ナデ整形を施すがやや雑で、全体的には波打っていたと思われる。

1はU－16グリッド、2はS－20グリッド、3はS－23グリッド、4はU－15グリッドから出土していて、調査区南側やや西寄りに集中する傾向がみられる。

m　砥石

金属製品が多量に出土した中堀遺跡では、砥石も多く出土している。

第818図1～4は表採である。

1は全体的に黒ずんでいる。上下が欠損していて、全体の大きさは不明である。

正面と右側面はよく使われていて平滑である。一方背面は剥離が激しく、使用面は中央に一部残っているだけである。

製材は安山岩である。

2はほぼ上下が一部欠損しているものの、完形である。

正面は良く使用されていて、大きく湾曲している。左右側面と背面には、沈線状の使用痕跡がみられ、釘などの先端を研いだものと思われる。

石材は安山岩である。

3は小型のもので、下端を欠損しているため、全体の大きさは不明である。

正面はよく使用されていて平滑で、弱く湾曲している。

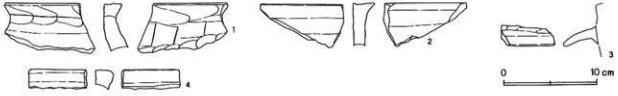
左側面と背面には使用痕跡と思われる、細かい浅い擦跡がみられる。

石材は安山岩である。

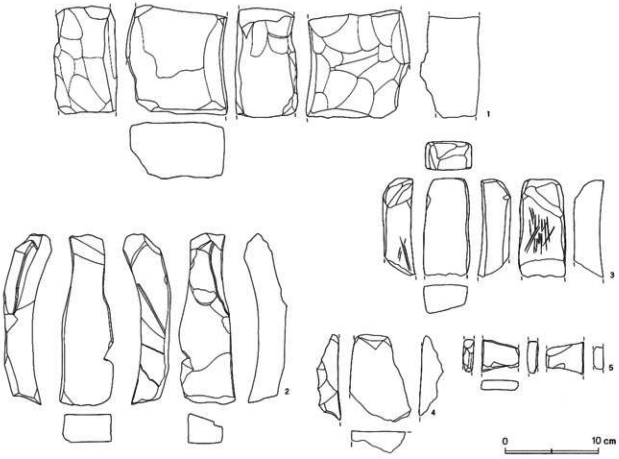
4は上下・背面が欠損し、使用面の一部だけしか残っていない。

正面はよく使用されていて、平滑である。

第817図　グリッド・表採　置カマド



第818図　グリッド・表採　砥石



石材は安山岩である。

5はJ－9グリッドで出土した。上下を欠損し、全体の大きさは不明であるが、残存している部分の大きさからみても小型品と思われる。

正面と背面はよく使用されて平滑であるが、左側面はあまり使用されていない。

石材は安山岩である。

n　棹秤の権

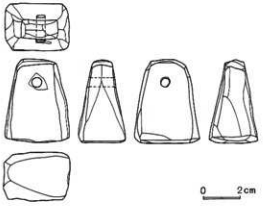
第819図はM－13グリッドから出土した。棹秤の権は、このほかにも第52・87・151号住居跡から1点ずつ出土している（出土した権の詳細については第V章1－（9）参照）。いずれも調査区中央より西側で出土している。

M－13グリッドから出土した権は完形品で、6面すべて面取りされている。とくに正面・左右側面・背面の4面はきれいに仕上げられ、一見下げ砥石と勘違いしそうである。

上部に設けられた孔は背面方向から開けられている。

石材は安山岩である。

第819図　グリッド　石製おもり



4　中世

中堀遺跡では、中世の遺構・遺物を検出した。

遺構の構成は、竪穴状遺構16基、掘立柱建物跡２棟、溝４条、集石29基、火葬墓１基と多数の小穴からなっていた。

遺構は、竪穴状遺構と掘立柱建物跡・溝の広がる調査区北西部と、集石の分布する南東部に分かれる。遺構は、焼土混じりの古代の遺物堆積層の直上に堆積した、浅間山Ｂ軽石層を掘り込んで構築されていた。そのため覆土に浅間山のＢ軽石が混入していた。

ここで竪穴状遺構とした遺構は、正方形に近い形状で重複も激しかった。柱穴やカマド・炉跡などは確認できなかった。

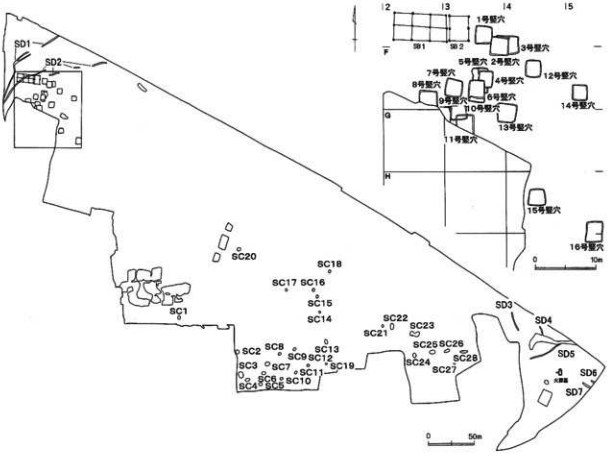
また集石は、拳大の石を直径１ｍ×10cm程度に積み上げた遺構で、遺構内からほとんど遺物は出土しなかった。遺構が、調査区東南部の砂礫の多い地山層の直上に構築されていたので、大変手間がかかった。

調査当初は、建物の地業跡（栗石）か墓跡と推定した。調査の結果、柱筋が通らなかったことなど、前者については否定的だったが、後者の可能性は残った。

中堀遺跡から出土した遺物としては、在地産の内耳鍋・片口鉢・すり鉢の他、常滑焼きの大甕、中国産青磁椀・皿などがあげられる。また古代の建物地業跡の南端部から、渡来銭がまとまって出土した。

全体的に中世の遺跡としては、出土遺物は貧弱であったが、多数の竪穴状遺構を確認するなどの成果があがった。

第820図　中世全体図



第661表　中世竪穴状遺構一覧表

番号	グリッド	住居跡形態	長径	短径	深さ	主軸方向
1	E-3	方形	2.77	2.64	0.14	N－4°－E
2	E-3／E-4／F-3／F-4	方形	2.93	2.83	0.52	N－10°－E
3	E-4／F-4	長方形		2.87	0.36	N－90°－E
4	F-3	長方形	2.65		0.50	N－96°－E
5	F-3	長方形	4.24			N－0°－E
6	F-3	不整長方形	3.63	2.62	0.46	N－4°－E
7	F-3	方形	2.99	2.81	0.20	N－10°－E
8	F-3	長方形	2.99		0.18	N－0°－E
9	F-2／F-3／G-2／G-3	方形			0.38	N－4°－E
10	F-3／G-3	方形	2.81	2.41	0.18	N－7°－E
11	G-3	長方形	2.76	2.37	0.20	N－94°－E
12	F-4	方形	3.44	2.45	0.23	N－93°－E
13	F-3／F-4／G-3／G-4	不整方形	3.18	2.97	0.22	N－4°－E
14	F-5	方形	2.39	2.31	0.29	N－90°－E
15	H-4	方形	2.73	2.70	0.40	N－90°－E
16	H-5／I-5	長方形	3.30	2.72	0.39	N－4°－E

（1）竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構（第821図）

E－3グリッドで確認した。

第2号掘立柱建物跡の東に位置し、東壁は第2号竪穴状遺構と接していた。

形状は方形で、規模は長軸2.77m・短軸2.64m・深さ0.2mであった。掘り方を0.1mほどで埋め（第3層）て、その上に土を貼り（第2層）、床面としていた。

長軸方向はN－4°－Eであった。

ほかの中世遺構との切り合い関係は、みられなかった。

第2号竪穴状遺構（第821図）

E・F－3・4グリッドで確認した。

第2号掘立柱建物跡の東に位置し、西壁は第1号竪穴状遺構と接していた。

形状は方形で、規模は長軸2.93m・短軸2.83m・深さ0.52mであった。

長軸方向は、N－10°－Eであった。

遺構の切り合い関係は、第3号竪穴状遺構より新しかった。

第3号竪穴状遺構（第821図）

E・F－4グリッドで確認した。

第5号竪穴状遺構の北西2.5mに位置した。

西半分は、第2号竪穴状遺構によって破壊されていた。

形状は長方形で、規模は長軸3.65m・短軸2.87m・深さ0.36mであった。

長軸方向は、N－90°－Eであった。

遺構の切り合い関係は、第2号竪穴状遺構より古かった。

第4号竪穴状遺構（第821図）

F－3グリッドで確認した。

第2号竪穴状遺構の南2mに位置した。

中世の竪穴状遺構が3基重複していて、確認に手間取った。

南西隅を第6号竪穴状遺構によって破壊されていた。

形状は長方形で、規模は長軸2.65m・短軸2.25m・深さ0.50mであった。

長軸方向は、N－96°－Eであった。

遺構の切り合い関係は、第6号竪穴状遺構より古く、第5号竪穴状遺構より新しかった。

第5号竪穴状遺構（第822図）

F－3グリッドで確認した。

第2号竪穴状遺構の南1・5mに位置した。

中世の竪穴状遺構が3基重複していて、確認に手間取った。

大半は、重複した遺構で破壊されていたが、長方形と推定した。規模は長軸4.24m・短軸3.65m・深さ0.25mであった。

長軸方向は、N－0°－Eであった。

遺構の切り合い関係は、第4・6号竪穴状遺構より古かった。

第6号竪穴状遺構（第822図）

F－3グリッドで確認した。

第2号竪穴状遺構の南4mに位置した。

中世の竪穴状遺構が3基重複していて、確認に手間取った。

形状は、南東隅の小さく張る不整長方形であった。規模は長軸3.63m・短軸2.62m・深さ0.46mであった。南壁に沿って、長さ2.5m・幅0.8m、床面からの高さ0.15mの棚状の高まりを第5層で造っていた。

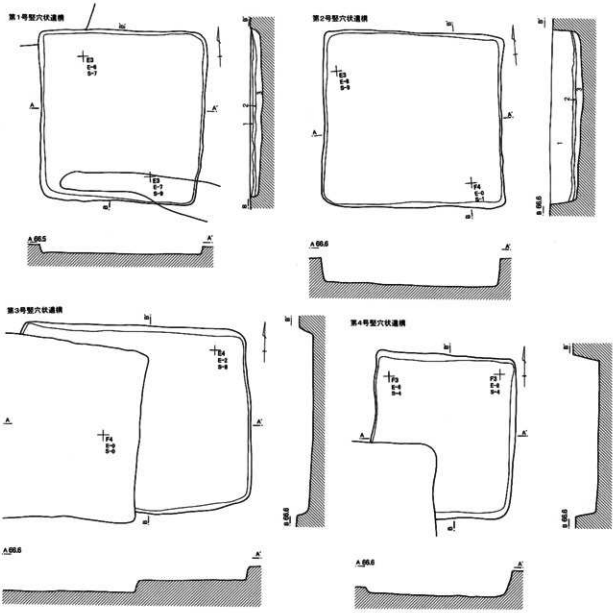
長軸方向は、N－4°－Eであった。

遺構の切り合い関係は、第4・5号竪穴状遺構より新しい。

第7号竪穴状遺構（第822図）

F－3グリッドで確認した。

第821図　中世竪穴状遺構（1）



第1・2号竪穴状遺構

1 暗茶褐色土　焼土、炭化物を少量含み、黄褐色土ブロックを微量含む
2 暗黄褐色土　固くたたきしめられている（貼り床）
3 暗褐色土　焼土、炭化物を微量含む（住居跡埋め方）

第6号竪穴状遺構

1 暗黒褐色土　B軽石主体
2 黒褐色土　黄褐色土ブロックを多量に含む(固くしまっていて壁の固しめたきしめたもの)
3 黒色土　炭化物を多量に含む(床面の敷きものが炭化したものか)

第8号竪穴状遺構

1 褐色土　炭化粒子を少量含む 粘性あり
2 暗灰褐色土　砂利を多量に含む
3 茶褐色土　粘性あり
4 暗褐色土　焼土、炭化粒子を少量含む 粘性あり
5 黄褐色土層　焼土、炭化粒子を微量含む
6 黄褐色土層　5層に似るが炭化物、焼土は含まない

11号竪穴状遺構

1 暗黒褐色土　B軽石を多量に含む
2 暗黒褐色土　9層と似るがやや明るい
3 褐色土　焼土粒子、炭化物を多量に含む 遺物を多量に含んでいる
4 黒色土　炭化物を多量に含む(床面の敷きものが炭化したものか)
5 黄褐色土　粘性あり（貼り床）

第12号竪穴状遺構

1 暗褐色土　B軽石を少量含む

第13号竪穴状遺構

1 黒褐色土　B軽石を多量に含む
2 黒褐色土　粘性あり
3 黒褐色土　炭化物を少量含む 粘性あり

第15号竪穴状遺構

1 暗褐色土　焼土、炭化物を微量含み、B軽石を少量含む 砂質
2 暗褐色土　炭化物を多量に含み、黄褐色の粘性のあるブロックを多量に含む

第16号竪穴状遺構

1 暗茶褐色土　B軽石を微量含む 砂質
2 灰茶黒色土　焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり

0　2m

第6号竪穴状遺構の西1m・第8号竪穴状遺構の東1.2mに位置した。

形状は方形で、規模は長軸2.99m・短軸2.81m・深さ0.20mであった。

長軸方向は、N－10°－Eであった。

ほかの中世遺構との切り合い関係はみられなかった。

第8号竪穴状遺構（第822図）

F－3グリッドで確認した。

第7号竪穴状遺構の西1.2mに位置した。南半が調査区外のため、形状など不明な点が多かった。

形状は長方形で、残存した北壁の長さは2.99m・深さ0.18mであった。

長軸方向は、N－0°－Eであった。

第9号竪穴状遺構（第822図）

F・G－2・3グリッドで確認した。

周辺は、中世の竪穴状遺構や古代の住居跡・土壙・小穴など遺構が極めて密集し、確認に手間取った。

第8号竪穴状遺構と第10号竪穴状遺構の間に接していた。また大半が調査区外のため、形状など不明な点が多かった。

推定される形状は方形で、残存する北壁の長さは2.5m・深さ0.38mであった。

長軸方向は、N－4°－Eであった。

第10号竪穴状遺構と重複していたが、明確にしえなかった。

第10号竪穴状遺構（第822図）

F・G－3グリッドで確認した。

周辺は、中世の竪穴状遺構や古代の住居跡・土壙・小穴など遺構が極めて密集し、確認に手間取った。

第7号竪穴状遺構の南1mに位置し、西壁が第9号竪穴状遺構と接していた。

形状は方形で、規模は長軸2.81m・短軸2.41m・深さ0.18mであった。

長軸方向は、N－7°－Wであった。

遺構の切り合い関係は、第11号竪穴状遺構より古かった。

第11号竪穴状遺構（第823図）

G－3グリッドで確認した。

周辺は、中世の竪穴状遺構や古代の住居跡・土壙・小穴など遺構が極めて密集し、確認に手間取った。

第6号竪穴状遺構の南2mに位置した。南半が調査区外のため形状など不明な点が多かった。

推定される形状は長方形で、残存する北壁の長さは、2.37m・深さ0.20mであった。

長軸方向は、N－94°－Eであった。

遺構の切り合い関係は、第10号竪穴状遺構より新しかった。

第12号竪穴状遺構（第823図）

F－4グリッドで確認した。

第3号竪穴状遺構の南東2mに位置した。

形状は方形で、規模は長軸2.72m・短軸2.45m・深さ0.23mであった。

長軸方向は、N－93°－Eであった。

ほかの中世遺構との切り合いは、みられなかった。

第13号竪穴状遺構（第823図）

F・G－3・4グリッドで確認した。

周辺は、中世の竪穴状遺構や古代の住居跡・土壙・小穴など遺構が極めて密集し、確認に手間取った。

第11号竪穴状遺構の東3.8m・第6号竪穴状遺構の南東2.5mに位置した。

形状は南東隅が小さく曲がる不整方形で、規模は長軸3.18m・短軸2.97m・深さ0.22mであった。

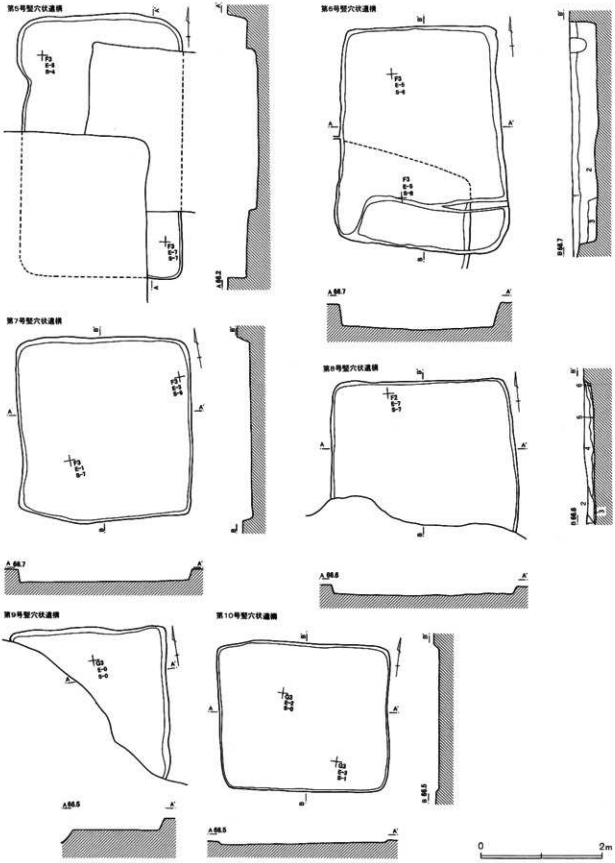
長軸方向は、N－4°－Eであった。

ほかの中世遺構との切り合いは、みられなかった。

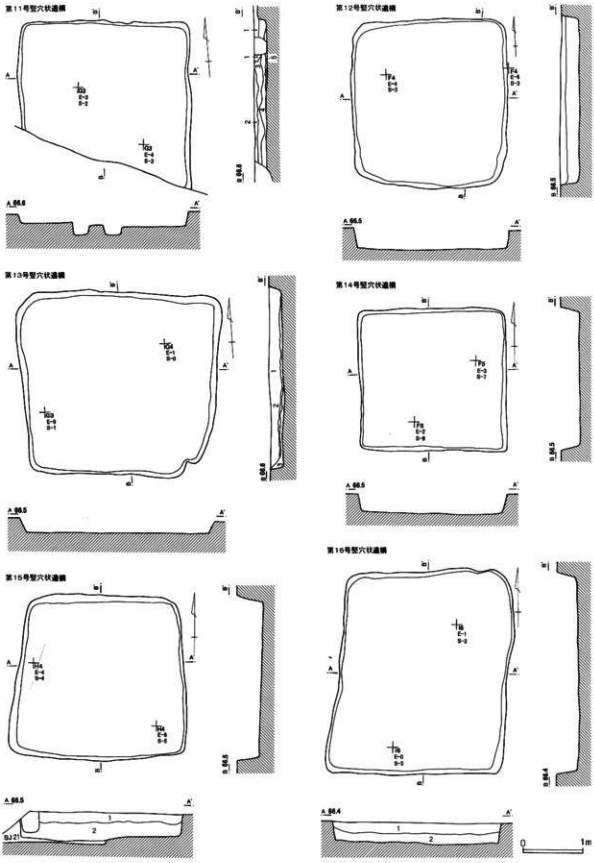
第14号竪穴状遺構（第823図）

F－5グリッドで確認した。

第822図　中世竪穴状遺構（2）



第823図　中世竪穴状遺構（3）



中世の竪穴状遺構が、密集する地域からやや東にはずれていた。最も近い第12号竪穴状遺構とは5.5m離れていた。

形状は方形で、規模は長軸2.39m・短軸2.31m・深さ0.29mであった。

長軸方向は、N－90°－Eであった。

ほかの中世遺構との切り合いは、みられなかった。

第15号竪穴状遺構（第823図）

H－4グリッドで確認した。

周辺は、古代の住居跡・土壙・小穴などの遺構が密集し、確認に手間取った。

第16号竪穴状遺構の西7.5mに位置した。

形状は方形で、規模は長軸2.73m・短軸2.70m・深さ0.40mであった。

長軸方向は、N－90°－Eであった。

ほかの中世遺構との切り合いは、みられなかった。

第16号竪穴状遺構（第823図）

H・I－5グリッドで確認した。

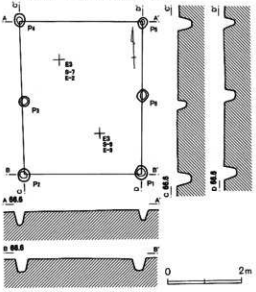
中世の竪穴状遺構の中で、最も南西に位置し、第15号竪穴状遺構とは7.5m離れていた。

形状は長方形で、規模は長軸3.30m・短軸2.72m・深さ0.39mであった。

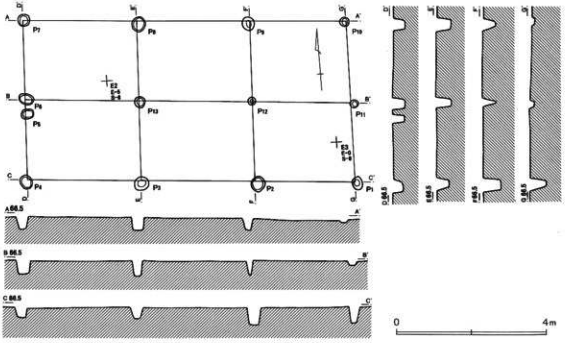
長軸方向は、N－4°－Eであった。

ほかの中世遺構との切り合いは、みられなかった。

第825図　第2号掘立柱建物跡



第824図　第1号掘立柱建物跡



（2）掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第824図）

E－2・3グリッドで確認された。第1号掘立柱建物跡の周辺は、礫層の上面であったため、当該柱穴の確認に手間取った。

梁行き2間×桁行き3間の建物（三間屋）が検出された。棟通りにも柱穴を確認した。P5は、入り口部の施設か。

柱穴は、円形の掘りかたであった。柱穴は、長径0.32m×短径0.3m×深さ0.27m、とやや小さい。浅間山B軽石混じりの黒色土が、柱穴の掘りかた内に充填されていた。

柱痕跡は確認できなかった。

棟方向は、N－87°－Wを指す東西棟であった。規模は、8.68m×4.22mを測る。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物の出土はなかった。

第2号掘立柱建物跡（第825図）

E－3グリッドで確認された。第2号掘立柱建物跡の周辺は、礫層の上面であったため、当該柱穴の確認に手間取った。

梁行き1間×桁行き2間の建物（二間屋）が検出された。

柱穴は、円形の掘りかたであった。柱穴は、長径0.34m×深さ0.3m×短径0.33m、とやや小さい。浅間山B軽石混じりの黒色土が、柱穴の掘りかた内に充填されていた。

柱痕跡は確認できなかった。

棟方向は、N－1°－Eを指す南北棟であった。規模は、4.06m×3.28mを測る。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物の出土はなかった。

（3）溝

第1号溝

C－3・4・D－2・E－1・2・F－1グリッドで確認された。

調査区外から北東に向かって延び、E－2杭付近で大きく東に曲がっていた。

一部途切れるが全長は30m、幅0.4m、深さ0.2mと浅く、覆土には浅間A軽石を含んでいた。

第2号溝

D－6・7・E－3・4・F－1グリッドで確認された。

調査区外から途切れながら北東に向かって延び、長さ50m、幅0.35m、深さ0.2mで、覆土には浅間A軽石を含んでいた。

第3号溝

調査区東端のQ－28グリッドで確認された。

長さ10m、幅0.2m、深さ0.1mと浅く、覆土には、少量の浅間A軽石と多量の砂利を含んでいた。

第4号溝

S－30グリッドで確認された。

南端を攪乱により破壊され全長は不明であるが、検出された長さは5m、幅0.2m、深さ0.15mであった。

覆土は第3号溝と類似し、長軸方向もほぼ一致した。

第5号溝

T－28・29・30・31グリッドで確認された。

御陣場川の旧河道に平行するように東西方向に延び、長さ38m、幅0.2m、深さ0.15mであった。

覆土には浅間A軽石と砂利を含んでいた。

第6・7号溝

V－31・32グリッドで確認された。

6号溝は長さ4m、7号溝は6m、両溝とも幅は0.35m、深さ0.15mであった。

覆土には砂利を多く含んでいた。

（4）集石

第1号集石（第826図）

R－10グリッドで確認した。

第2号建物地形跡の南に位置した。

長軸2.35m・短軸1.38m・深さ0.38mの長方形の掘り込みの底面から、やや浮いた状態で拳大から人頭大の礫がまとまって出土した。

集石28基中掘り込みのあるのは、第1号集石だけであった。

第2号集石（第826図）

T－13グリッドで確認した。

第3号集石の北8mに位置した。

長さ1.7m・幅1.52mの範囲に、拳大の礫が円形に密集していた。

掘り込みや集石を覆う堆積物は、検出できなかった。

第3号集石（第826図）

U－13・14グリッドで確認した。

第2号集石の南8m・第4号集石の西4mに位置した。

長さ3.25m・幅2.23mの範囲に、拳大の礫が密集していた。とくに北西に礫が密集し、南西へ次第に疎らになっていた。

掘り込みや集石を覆う堆積物は、検出できなかった。

第4号集石（第826図）

U－14グリッドで確認した。

第3号集石の東4m・第5号集石の西7mに位置した。

長さ1.76m・幅1.41mの範囲に、拳大の礫が疎らにあった。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第5号集石（第826図）

U－14・15グリッドで確認した。

第4号集石の東7m・第6号集石の南6.5mに位置した。

長さ2.38m・幅1.43mの範囲に、拳大の礫が円形に密集していたが、中央部の礫は疎らであった。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第6号集石（第826図）

U－15グリッドで確認した。

第5号集石の北6.5m・第7号集石の南5mに位置した。

長さ1.82m・幅1.67mの範囲に、拳大の礫が円形に密集していた。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検できなかった。

第7号集石（第826図）

T－15グリッドで確認した。

第6号集石の北5m・第8号集石の南西8mに位置した。

長さ1.97m・幅1.71mの範囲に、拳大の礫が円形に密集していた。とくに中央部が集中し、周辺は疎らであった。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第8号集石（第826図）

T－16グリッドで確認した。

第7号集石の北東8m・第9号集石の西8.5mに位置した。

長さ1.37m・幅1.08mの狭い範囲に、拳大の礫が密集していた。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第9号集石（第826図）

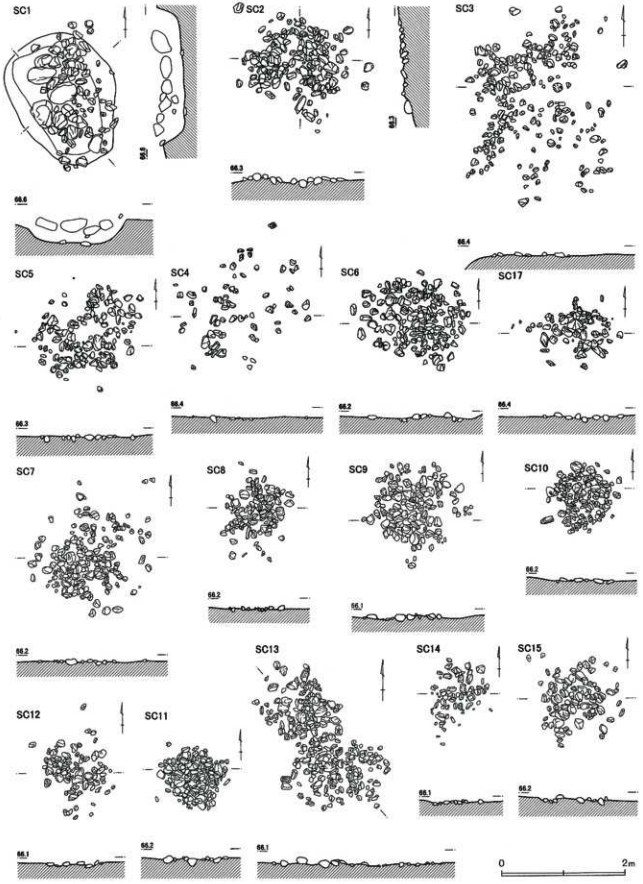
S・T－16グリッドで確認した。

第8号集石の東8.5mに位置した。

長さ1.79m・幅1.65mの範囲に、拳大の礫が円形に密集していた。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第826図　集石（1）


SC1
SC2
SC3
SC4
SC5
SC6
SC7
SC8
SC9
SC10
SC11
SC12
SC13
SC14
SC15
SC17
0
2m

第10号集石（第826図）

U－16グリッドで確認した。

第６号集石の東10ｍ・第11号集石の西９ｍに位置した。

長さ1.19ｍ・幅1.10ｍの狭い範囲に、拳大の礫が円形に密集していた。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第11号集石（第826図）

U－16グリッドで確認した。

第10号集石の東９ｍ・第12号集石の西7.5ｍに位置した。

長さ1.13ｍ・幅0.95ｍの狭い範囲に、拳大の礫が円形に密集していた。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第12号集石（第826図）

T－17グリッドで確認した。

第11号集石の東7.5ｍ・第19号集石の西9.5ｍに位置した。

長さ1.28ｍ・幅1.1ｍの狭い範囲に、拳大の礫がやや疎らであった。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第13号集石（第826図）

S－18グリッドで確認した。

第19号集石の北10ｍに位置した。

長さ2.83ｍ・幅1.1ｍのやや広い範囲に、拳大の礫が密集していた。礫の集中する部分は北西と南東に分割でき、北西の礫がやや大形で密集していた。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第14号集石（第826図）

Q・R－18グリッドで確認した。

第15号集石の南9.5ｍに位置した。

長さ1.37ｍ・幅0.92ｍの狭い範囲に、拳大の礫が疎らであった。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第15号集石（第826図）

Q－18グリッドで確認した。

第14号集石の北9.5ｍ・第16号集石の南東4.5ｍに位置した。

長さ1.52ｍ・幅1.31ｍの範囲に、拳大の礫が密集していた。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第16号集石（第827図）

P－17グリッドで確認した。

第15号集石の北西4.5ｍに位置した。

長さ1.38ｍ・幅0.98ｍの範囲に、拳大から人頭大の礫が密集していた。礫のなかには、凝灰岩の切石（５）も含まれていた。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第17号集石（第826図）

P－16グリッドで確認した。

第16号集石の西14ｍに位置した。

長さ1.55ｍ・幅1.16ｍの範囲に拳大の礫が密集していた。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第18号集石（第827図）

O－18グリッドで確認した。

第16号集石の北東13.5ｍに位置した。

長さは0.68ｍ・幅0.46ｍの狭い範囲に、拳大から人頭大の礫がまとまって出土した。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

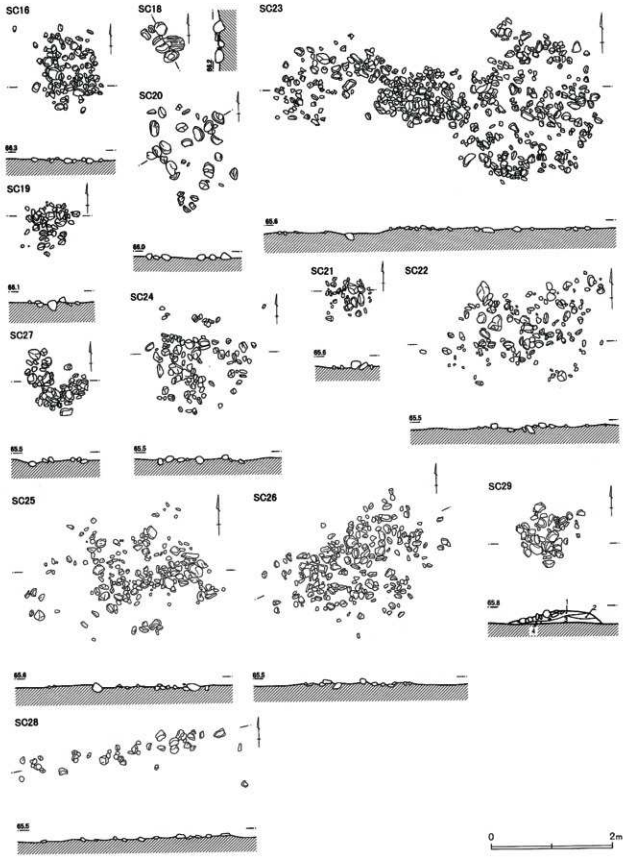
第19号集石（第827図）

T－18グリッドで確認した。

第12号集石の東9.5ｍ・第13号集石の南12.5ｍに位置した。

長さ0.86ｍ・幅0.86ｍの狭い範囲に、やや疎らに拳

第827図　集石（2）


SC16
SC18
SC23
SC20
SC19
SC21
SC22
SC24
SC27
SC25
SC26
SC29
SC28
0
2m

大の礫があった。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第20号集石（第827図）

N－13・14グリッドで確認した。

周辺には集石はみられず、南東に33m離れた第17号集石が最も近い。長さ1.76m・幅1.38mの範囲に、拳大から人頭大の礫が疎らにあった。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第21号集石（第827図）

R－21グリッドで確認した。

第22号集石の西5.5mに位置した。

長さ0.73m・幅0.61mの狭い範囲に、拳大から人頭大の礫が密集していた。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第22号集石（第827図）

R・S－22グリッドで確認した。

第21号集石の東5.5m・第23号集石の西12.5mに位置した。

長さ2.83m・幅1.55mのやや広い範囲に、拳大から人頭大の礫が疎らにあった。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第23号集石（第827図）

S－23グリッドで確認した。

第22号集石の東12.5m、第24号集石の北10.5mに位置した。

長さ5.3m・幅2.7mの広い範囲に、拳大から人頭大の礫がやや疎らにあった。礫の分布は、中央部分が最も密集し、東は大きく円形に広がり、西は小さく疎らであった。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第24号集石（第827図）

T－23グリッドで確認した。

第23号集石の南10.5m、第25号集石の西9mに位置した。

長さ1.79m・幅1.62mの範囲に、拳大から人頭大の礫がやや疎らにあった。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第25号集石（第827図）

T－24グリッドで確認した。

第24号集石の東9m、第26号集石の西7mに位置した。

長さ3.17m・幅1.56mのやや広い範囲に、拳大から人頭大の礫がやや疎らにあった。とくに東は密集し、大形の礫もみられた。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第26号集石（第827図）

T－24・25グリッドで確認した。

第25号集石の東7m、第28号集石の西9mに位置した。

長さ2.71m・幅1.70mの範囲に、拳大から人頭大の礫がやや密集していた。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第27号集石（第827図）

T－25グリッドで確認した。

第26号集石の南東7.5m、第28号集石の南西9mに位置した。

長さ2.05m・幅1.1mの範囲に、拳大から人頭大の礫が密集していた。礫の分布は、北が密集し、南は小さく疎らであった。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

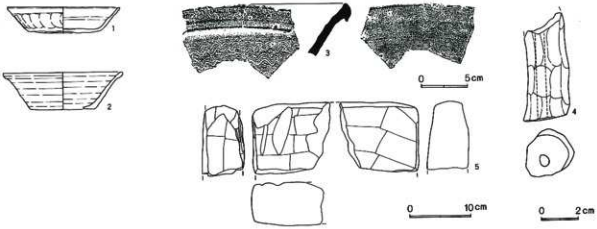
第28号集石（第827図）

T－25・26グリッドで確認した。

第26号集石の東9m・第27号集石の北東9mに位置した。

長さ3.55m・幅0.59mの細長い範囲に、拳大の礫が

第828図　集石出土遺物



第662表　集石出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	輪幅	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.7	2.7		5.5	B, D, E, H	普通		暗茶褐	20	
2	椀	H S	12.3	3.9		6.7	B, C, G	良好		灰黄褐	20	
3	大甕	S					B	良好		青灰	5	

疎らに列状に並んでいた。

掘り込みや集石を覆う堆積物は検出できなかった。

第29号集石

J－13グリッドで確認した。

集石のなかで最も北に位置した。周辺に集石はみられず、最も近い第20号集石でも40m以上離れていた。

長さ1.2m・幅1mの範囲に、拳大から人頭大の礫が密集していた。これらの礫を覆うように第1層が盛られていた。

礫を除去したところ土師器坏（1）、須恵器坏（2）、大甕口縁部（3）、土錘（4）が出土した。

遺構の切り合い関係は、第385号土壙より新しかった。

（5）火葬墓

U－32グリッドで確認した。

調査区の東端、旧河川跡の直上に形成されていた。

当初は、竪穴式住居跡として調査を開始したが、形状や堆積層の検討から火葬墓と判断した。

長方形の竪穴と、竪穴の長辺中央に付けられた溝状の導入部からなっていた。竪穴の規模は、長辺2.76m・短辺1.5m・深さ0.13m、導入部長さ1.23m・幅0.47mであった。

竪穴の長軸方向は、N－86°－Wであった。

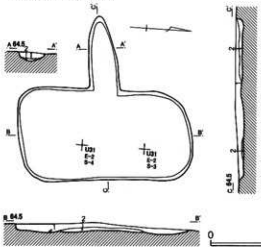
出土遺物は、とくにみられなかった。

（6）中世の遺物

第830図1から3は、第1号溝から出土した。

1　内耳鍋　口径27.8cm　器高17.2cm　瓦質の鍋である。口縁部は外反し、端部は僅かに内側に折り込む形態をなしている。口縁部内側に内耳を貼付している。耳は三ヶ所に付したものと推定される。体部は垂直におり、底部は丸底を呈する。体部は横ナデされ、底部

第829図　火葬墓跡



火葬墓跡
1　暗茶褐色土　焼土粒子・炭化物粒子を多く含む　粘性強く　粒子細い
2　暗茶褐色土　1層より明るい　焼土・炭化物多い　粘性強く　粒子細かい　最下面に炭化物のうすい堆あり

にはケズリが施されている。

2　片口鉢　口径25.4cm　瓦質の片口鉢である。口縁部は僅かに内側に湾曲する形態をなしている。口縁の一端を指により外に折り曲げて片口を作り出している。体部は横位に成形痕が残る。

3　常滑片口鉢　口径27.4cm　器高9.4cm　底形12.3cm　常滑の片口鉢破片である。口縁端部に片口が付されるのが普通であるが、破片資料のため片口部分はない。色調は赤褐色を呈する。口縁部付近は両面ナデ調整されている。体部は縦方向にハケ調整をしている。

図版431（上）は、全て青磁碗・皿の破片である。個体数は4なしは5個体である。1・9は、第14号竪穴状遺構。2は、第5号竪穴状遺構。3・5は、第7号竪穴状遺構。4は、第1号竪穴状遺構。6は、第2号竪穴状遺構。7・10は、表採。8は、G－4グリッドP－45。11は、第15号竪穴状遺構。

1～5は青磁劃花文碗の破片である。3と5は同一個体と思われる。3と5は素地も白色で、器面に色調は淡青色を呈する。他の製品はややくすんだ色調の緑色を呈する。いずれも器内面に劃花文が施されている。6・7の2点も劃花文碗の底部付近の破片と思われる。8・9の2点は青磁連弁文碗の破片である。8はやや淡い青緑色を呈し、9は貫入が著しい青緑色を呈する。素地は配色を呈し、堅緻である。

11　同安窯系青磁皿である。器内面に櫛描きの弧状の文様を施した皿である。底部は平底で丁寧はケズリ、ナデ調整が施されている。

図版431（下）　12は、G－4グリッド。13は、E－5グリッド。14は、E－9グリッド。15は、G－4グリッドP－55。16は、表採。17は、第12号竪穴状遺構。18は、第9号竪穴状遺構から出土した。

12・14は瓦質内耳鍋である。両方とも口縁部付近の小破片である。小石混じりの粗土で、暗い黄褐色を呈している。14の外面は煤状の付着物も見られ、黒褐色を呈している。両者とも焼きは比較的良い。口縁部形態から図示したものと同時期のものと推定される。

13は瓦質の片口鉢の破片である。色調は赤褐色を呈し、土師質のような色調を呈するが、焼成は比較的良好である。口縁部はやや内側に曲げ、端部を尖り気味につくっている。器内面はよく使用されたと思われ、平滑な面をなしている。

15は常滑片口鉢の底部破片である。色調は赤褐色を呈する。片口鉢に高台が付されていたと思われ、高台部分が剥がれている。高台部周辺には一段の回転ヘラ削りが認められる。器内面は摩滅が著しい。

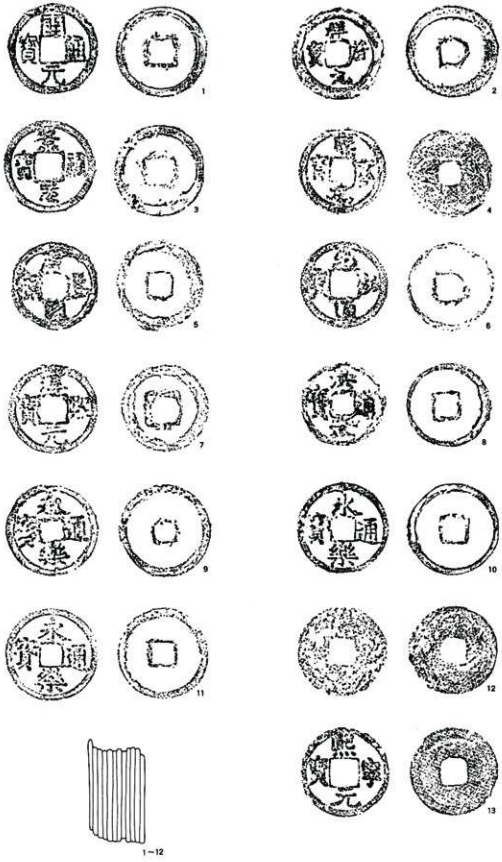
16～18は常滑甕の破片である。16は底部破片である。他に二点は胴部の破片である。赤褐色を呈する。焼きは良く、堅緻な焼き上がりとなっている。

中世陶磁器の出土は、この他に僅かな破片資料が認められるのみで、極めて少なかった。検出されたものを陶磁器の時期を概観すると次のようである。

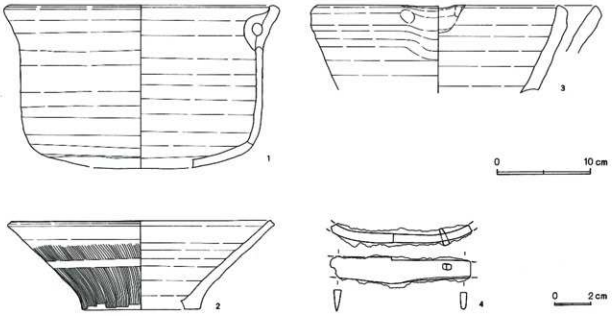
中国陶磁類は、龍泉窯系劃花文碗や同安窯系皿などが、12世紀後半から13世紀前半に位置づけられ、龍泉窯系連弁文碗が13世紀中葉から14世紀前葉に位置づけられるものである。

国産陶器は常滑と在地産の片口鉢、内耳鍋があった。常滑の片口鉢は13世紀前葉のものと14世紀代のものが認められた。在地産の片口鉢は13世紀後葉から14世紀前葉の時期が与えられる。瓦質内耳鍋は古く見ても14世紀後葉を遡るものとは思われない。このように、陶

第830図　グリッド・表採　銭



第831図　中世の遺物



磁器の時期幅は200年を越えるものである。ただ、中国陶磁器の希少性などを考えると、青磁などの耐用年数は長いものとも思われる。

中世の陶磁器類は、明確に遺構に伴ったものは極めて少なかった。そのため、中世段階のこの遺跡の性格を考える場合は遺構のあり方から考えた方が適切であろう。

この遺跡の遺構は主に、調査区の北西部の竪穴状遺構に極めて特徴的であることが指摘できる。竪穴状遺構は方形竪穴状遺構とも言われ、東国各地で確認することができる。

報告書抄録

ふりがな	なかぼりいせき
書名	中堀遺跡
副書名	御陣場川堤調節池関係埋蔵文化財発掘調査報告　第3分冊
巻次	
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第190集
編著者名	田中広明・末木啓介
編集機関	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369－01　埼玉県大里郡大里村大字筑輪884　TEL 0493－39－3955
発行年月日	西暦1997（平成9）年12月26日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
なかぼりいせき 中堀遺跡	さいたまけんこだまぐんかみさとまち 埼玉県児玉郡上里町 おおあざつつんあざなかぼりんなん 大字提字中堀南763 番地他	11385	017	36°14′44″	139°08′10″	19910401 ～ 19941231	27,000	調節池建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中堀遺跡	集落跡	縄文時代		抉入尖頭器 土器　石器	
		古墳時代	住居跡6　溝1	土師器	
		奈良・平安時代	住居跡258　掘立柱建物跡65　建物跡3　区画溝33　溝42　集石列1　柵列23　道路状遺構2　橋状遺構1　土壙730　土壙群4　井戸跡3　竪穴状遺構14　鍛冶炉跡17　大甕埋設遺構15　土器埋設遺構14　馬骨・人骨出土地点17　畝状遺構3　風倒木跡2	土師器 須恵器 灰釉陶器 緑釉陶器 白磁 石製品 鉄製品 銅製品	遺跡内は、溝により区画された大形掘立柱建物跡・住居跡が整然と配置。 帯金具・漆紙文書・刻字紡錘車・墨書土器等出土
		中世	竪穴状遺構16　掘立柱建物跡2　溝4　集石29　火葬墓1	磁器 陶器	

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第190集

上　里　町

中堀遺跡

御陣場川提調節池関係
埋蔵文化財発掘調査報告
第３分冊

平成９年12月10日　印刷
平成９年12月26日　発行

発行／財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369－01　埼玉県大里郡大里村大字笑輪884
電話　0493（39）3955
印刷／有限会社　平電子印刷所